



図138 平安時代の遺構占地位状図



図139 平安時代の遺構占地状況横断面

第2節 平安時代の建物等の変遷について

中平遺跡の4ヶ年の調査では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝跡などが組み合わされる建物跡が30棟、単独の竪穴住居跡が47軒、合計77棟分の建物跡等が検出され、これとは別に外周溝と思われる溝跡も7条検出されている（表45・49）。第1節でも述べたように、平安時代の建物跡等は巨視的にみればある程度のまとまりがあるものの建物同士の重複は少なく、散在する傾向が強い。建物跡等は建て替え（拡張・改築を含む）されるものが13軒・14例あり、時期変遷を考える上で重要である。

1 火山灰との前後関係

中平遺跡では平安時代の火山灰としてTo-aとB-Tmが検出されていて、建物跡等でこれら火山灰との時期的前後関係が客観的につかめる建物跡等を表45と図141～143にまとめた。その事例として、火山灰が住居覆土に堆積するもの、外周溝覆土に堆積するもの、火山灰が堆積する他遺構と重複関係にあって間接的に前後関係がつかめるもの、などがある。また、前後関係や時間差を考える際、下記項目に留意して分析していくこととした。

- (1) 自然堆積の場合、住居の覆土に火山灰が堆積しているものは、床面に火山灰が近ければ近いほど火山灰降下直前に廃絶されたものといえる。
- (2) 埋め戻されたものや焼失家屋の場合、短期間で覆土中位程度まで埋め戻されることになり、火山灰の検出高（床面もしくは底面からの高さ）がそのまま時間の経過には結びつかない。
- (3) 外周溝は掘られて上部を開口させることによって溝としての機能が開始されることから、火山灰が底面に近ければ近いほど火山灰降下直前に使用開始されたものといえることができる。
- (4) 外周溝は使用されている間も埋没過程は進行している。ある程度埋まった状態でも使用されて（機能して）いた可能性が高い。
- (5) 建物跡等で火山灰が検出されていないものについては、以下の例が考えられる。
 - ①火山灰が降下する前に自然堆積で埋まりきってしまった場合。→廃絶されてから降下までに相当の時間差がある。
 - ②自然堆積が進んだ段階で火山灰が降下したが、表面を後世の削平等によって剥ぎ取られ、調査で検出できない場合。→廃絶されてから降下までにある程度の時間差がある。
 - ③火山灰が降下する前に人為的に埋め戻された場合。
 - 降下前に廃絶されたが、どれくらいの時間差があるか不明（降下直前の可能性もある。）。
 - ④火山灰が降下した後に建物等を構築した場合。
 - ⑤火山灰が降下した後に建物等を廃絶した場合。

以上の事項に留意しながら火山灰との前後関係がわかる建物等を時期ごとに振り分けたところ、下記及び図141～143に示したとおり、灰1期～灰4期までの4つの時期に区分できるものと考えた。なおここで記載する用語等については、表45下部にその要領を示してある。

灰1期－火山灰が検出されていないが、火山灰が降下するまでに相当の期間が想定されるもの。

農道9号4竪穴・6竪穴、農道27号3竪穴の3軒で、重複関係によって廃絶から火山灰降下まで相当の期間が経過している。地山をしっかりと深く掘り込んで住居・床面を構築しており、柱穴は検出されていない。

灰2期－火山灰が住居覆土上位から中位に堆積しているもので、火山灰が降下する前の時期に廃絶されたもの。

10軒あり、しっかりと深く掘り込んだ住居4軒、やや深く掘り込んだ程度で床面を作る住居4軒、遺構確認面レベルで床面を作る浅い住居1軒、と混在している。壁溝はないもの2軒、あるものが7軒で、壁溝があるものが増える。柱穴はほとんど見あたらず、壁溝があるものでは数基程度柱穴が見つかる場合もあるが、明確な支柱穴とはならないようである。この時期に掘立柱建物跡とセットになる建物跡（農道27号2建物）が出現するが、柱穴が不十分であることと、堅穴覆土下位が埋め戻されている可能性があることから、次の灰3期により近い時期である可能性が高い。

灰3期－火山灰が住居覆土下位に堆積しているものや、焼失住居及び埋め戻された土層上位に火山灰が堆積しているもの、すなわち火山灰が降下する直前に廃絶されたもの。

9軒あり、しっかりと深く掘り込んだ住居7軒、やや深く掘り込んだ程度で床面を作る住居2軒がある。壁溝はないものが3軒、あるものが6軒で、壁溝のあるものが多い。柱穴は、壁溝がないものには灰2期と同様ほとんど存在しないが、壁溝があるものでは隅柱・壁柱が用いられ、明確な内柱（農道29号1堅穴（新））も出現する。そしてこの時期に掘立柱建物跡がセットになる建物が定着するようである。農道10号2建物（図142）は、灰2期では単独の堅穴住居であるが、建て替えた際（灰3期）に、掘立柱建物も増築したものと思われる。また農道2号2建物（古）にみられる小規模な外周溝は本期に属するが、次の灰4期には大きな規模の外周溝へと造り替えている（図143）。

灰4期－火山灰が外周溝に堆積しており、住居覆土には堆積していないもの。つまり火山灰降下時に使用されていた可能性があるもの。

堅穴住居の掘り込みは浅いものが増えて掘り方のみ検出される例（農道9号5建物）もある。壁溝を有するものが多く、支柱穴は内柱のものが多くなる。

灰4期で最も特徴的なのが、堅穴住居に加えて掘立柱建物跡・外周溝がセットになるものが主体となることである。農道9号5建物、農道11号1建物、農道2号2建物（新）は、いずれも堅穴住居部分に火山灰は検出されておらず、外周溝にのみ検出されている。すでに述べたように外周溝は使用され（機能し）始めた時点で埋没が進行すると考えられ、外周溝下位部分が埋まった状態で使用されていた可能性がある。言い換えれば、外周溝覆土中位から上位に火山灰が堆積していたとしても、堅穴住居部分に上屋があれば堅穴住居覆土に火山灰は堆積しないで外周溝に流入するものと考えられ、火山灰降下時に居住（使用）されていた可能性が高い。

また農道10号6建物では覆土中位以下は埋め戻されていて、それに混入するようにブロック状の火山灰が検出されていることから、上屋に降下した火山灰などがブロック状に混入した状態で埋め戻されたことが考えられる。この建物跡は、掘り方が長方形をなす内柱タイプの明確な支柱穴が検出されていて柱に板材を使用した可能性がある。

2 住居の建て替え事例

住居の建て替えは、以下のとおり13軒において14例認められている。

農道1号－2号建物（古・新） 農道2号－2号建物（古・新） 農道8号－1号建物（古・新）
農道10号－1号建物（古・新）、*2号建物（古・新）、3号建物（古・中・新）、9号堅穴（古・新）、4号建物（新）

表45 火山灰との前後関係がわかる建物・竪穴住居一覧表

火山灰からみた時期	竪穴の類別	調査年度	遺蹟	建物・竪穴住居名		建物の構成		竪穴住居の構造			火山灰の堆積状況等			備考	
				建物	竪穴住居名	竪穴住居跡	その他	カマド方向	内柱	隅柱	壁柱	壁	あり		深さ
灰1期 1期	深A群	20	9号	第4号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	B-Tmが堆積する9号3溝より古い
灰1期 1期	深A群	20	9号	第6号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	なし	深い	深い	-	-	-	B-Tmが堆積する9号16溝より古い
灰1期 1期	深A群	21	27号	第3号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	なし	深い	深い	-	-	-	重積するSD10に火山灰堆積
灰2期 2期	深A群	20	9号	第3号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	-	深い	深い	-	-	-	C14年代では9世紀中葉-10世紀後葉
灰2期 2期	深B群	21	27号	第2号建物跡	SE04	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	C14年代では9世紀中葉-10世紀後葉
灰2期 2期	やや深B群	21	27号	第7号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	あり	やや深い	やや深い	-	-	-	上位自然
灰2期 2期	やや深B群	20	9号	第2号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	あり	やや深い	やや深い	-	-	-	上位自然
灰3期 3期	深A群	21	27号	第6号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	C14年代では8世紀後葉-9世紀後葉(古本効果?)
灰2期 2期	やや深A群	22	30号	第3号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	-	深い	深い	-	-	-	焼失
灰2期 2期	やや深B群	19	6号	第1号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	あり	やや深い	やや深い	-	-	-	自然
灰2期 2期	浅B群	19	7号	第1号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	自然
灰2期 2期	-	20	11号	第7号溝跡	-	-	なし	なし	-	深い	深い	-	-	-	-
灰2期 2期	深A群	20	8号	第3号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	-	深い	深い	-	-	-	上位自然
灰3期 3期	深A群	21	27号	第4号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	-	深い	深い	-	-	-	上位自然
灰4期 4期	深B群	20	10号	第6号建物跡	SB11	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	中下位埋め戻し
灰2期 2期	深B群	22	29号	第1号竪穴住居跡(古)	SI01(古)	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	重積するSI01(新)に火山灰堆積
灰3期 3期	深B群	22	29号	第1号竪穴住居跡(新)	SI01(新)	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	重積するSI01(新)に火山灰堆積
灰3期 3期	やや深B群	19	7号	第2号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	上位自然
灰3期 3期	深B群	20	9号	第1号竪穴住居跡	-	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	下位埋め戻し
灰2期 2期	深B群	20	10号	第2号建物跡(古)	SI02a	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	下位埋め戻し
灰3期 3期	深B群	20	10号	第2号建物跡(新)	SI02b	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	下位埋め戻し
灰3期 3期	深B群	20	10号	第8号竪穴住居跡	SI08	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	埋め戻し
灰4期 4期	浅A群	20	9号	第5号建物跡	SI05	-	なし	なし	-	深い	深い	-	-	-	埋め戻し
灰3期 3期	-	20	10号	第11号溝跡	-	-	なし	なし	-	深い	深い	-	-	-	埋め戻し
灰4期 4期	浅B群	20	11号	第1号建物跡	SB03	-	なし	なし	-	深い	深い	-	-	-	不明(掘り方のみ)
灰3期 3期	やや深B群	20	2号	第2号建物跡(古)	SI02b	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	外周溝・土坑
灰4期 4期	浅B群	20	2号	第2号建物跡(新)	SI02a	-	なし	なし	あり	深い	深い	-	-	-	不明(即平)
灰4期 4期	-	20	11号	第4号溝跡	SD04	-	なし	なし	-	深い	深い	-	-	-	自然

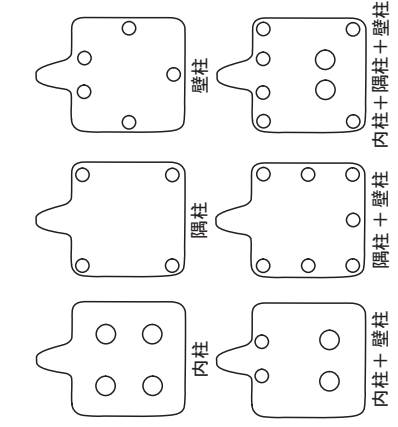


図140 柱穴配置模式図

<表45注>
○建て替えるものは、この表中では時期を区別したが、集成図では最終期の形態で掲載した。
○「建物の構成」組み合わせられて建物を構成するものを記載。住居内土坑等小規模施設は割愛。
○表中の「-」は「存在しない」もしくは「該当なし」、「?」は「存在不明(調査区域外等に存在する可能性あり)」という意。
○竪穴住居の構造として「カマド」「柱穴」「壁溝」「掘り込み」を記載。
・「カマド」 カマドが遺存するものはその軸方向を記載し、「地下式カマド」のみ「地下式カマド」である。
・「柱穴」 壁から離れて住居内部に柱穴があるものを「内柱」、住居隅に柱穴があるものを「隅柱」、住居壁で隅柱と隅柱の間に柱穴があるものを「壁柱」、壁が掘り込まれた場合に柱穴があるものを「浅」(掘り方のみ)とした(図140)。それぞれ不確定なものには「?」を付した。
・「壁溝」 「なし」「あり」で区別した。
・「掘り込み」 掘り込みが掘り込まれた場合、堆積土に土壌・炭化物等が投入されたと推定されるものを「浅」とした。
主観的要素を多分に含んでいることをお断りしておく。
○「火山灰の堆積状況」
・平安時代以降に降下したToaとB-Tmの2つの火山灰が竪穴住居に堆積している状況を記し、外周溝に堆積しているものは「外周溝」を付した。
・火山灰が堆積されたものは「降下前」・「降下後」双方想定されるが、遺構の重複関係から判断したのもある。
・焼戻時(直後)に埋め戻しや焼失があった場合、堆積土に土壌・炭化物等が投入されたと推定されるため埋没が急激に進むこととなる。埋め戻された直後に火山灰が降下しても堆積土上部に火山灰が堆積されることとなるため、自然堆積、埋め戻し、焼失など埋没速度に影響を及ぼす恐れがある事項などを「埋没状況」に記した。
・火山灰が堆積されたものは「なし」、報告書に火山灰の有無の記載がないものは「不明」として記した。
○「火山灰」 Toaは西暦915年とし、ここでは10世紀前半(921~940年)とした。B-Tmは西暦926年、936年、937~938年、939年、947年、969年、1039年と諸説があるが、ここでは10世紀中葉(941~960年)を火山灰降下時期とした。なお本書での各世紀の細分は「初頭」・「前半」・「後葉」・「末葉」の5区分(20年単位)としたが、「前半」・「後半」も使用している。
○表49も上記要領で作成している。

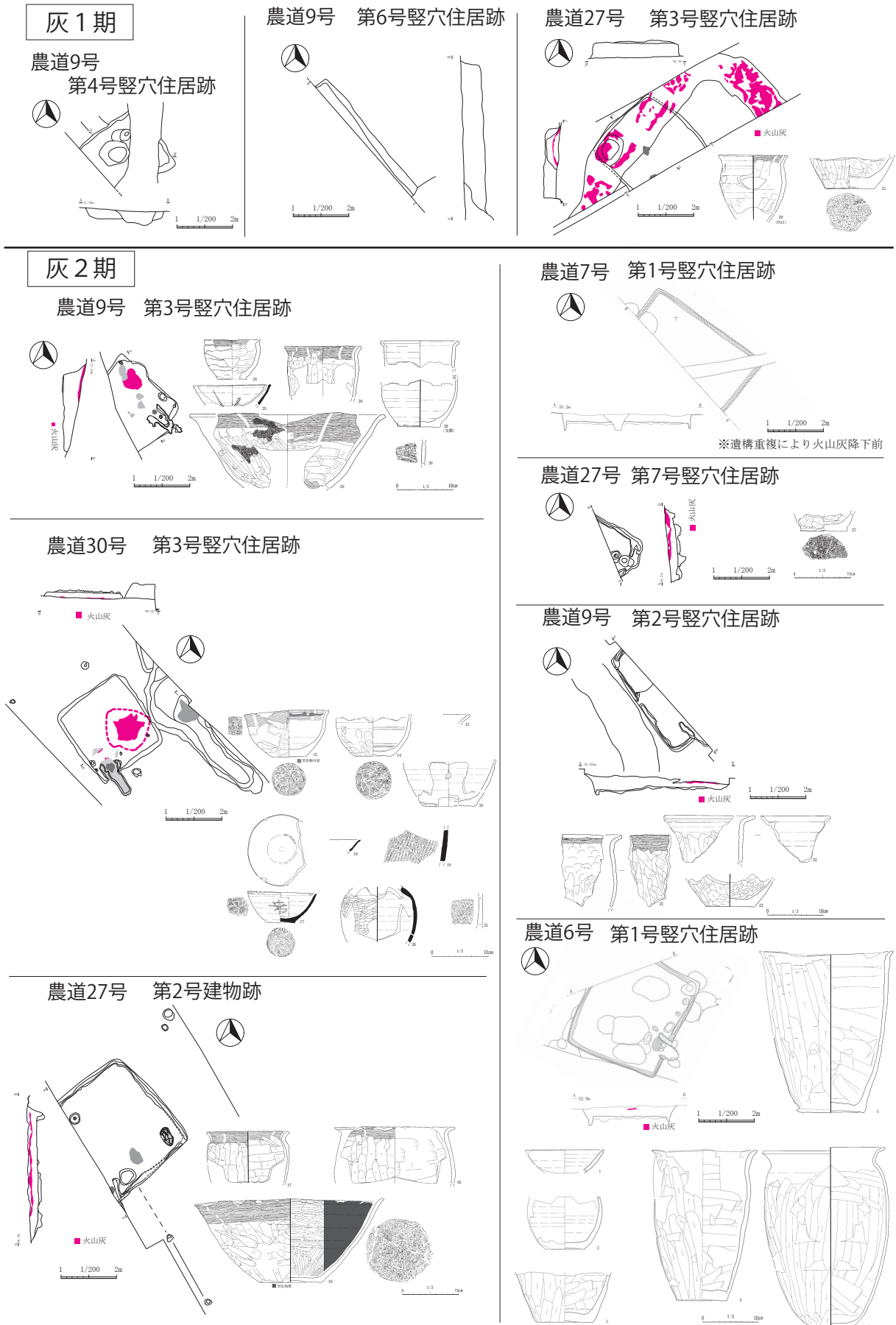
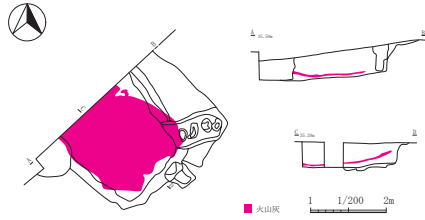


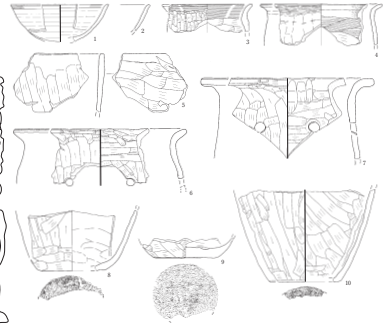
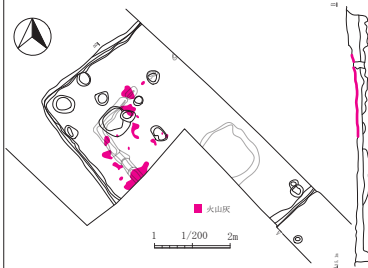
図141 火山灰堆積状況からみた竖穴住居等集成図 (1) 灰1期・灰2期

灰3期

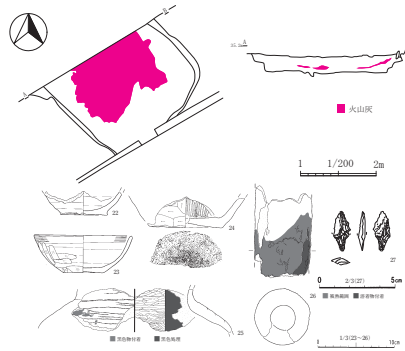
農道8号 第3号竖穴住居跡



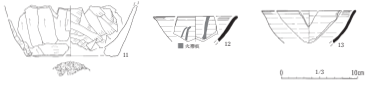
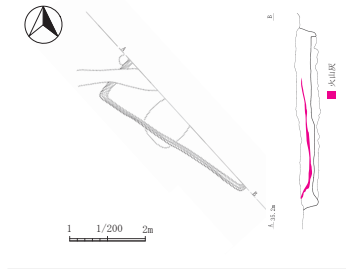
農道29号 第1号竖穴住居跡(新)(古)



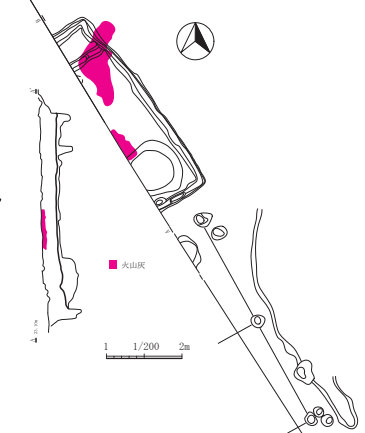
農道27号 第4号竖穴住居跡



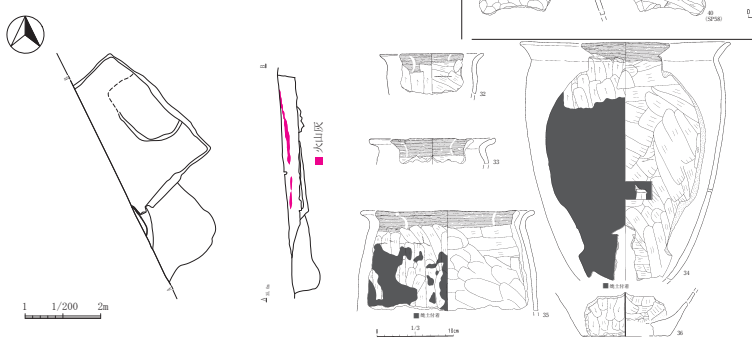
農道7号 第2号竖穴住居跡



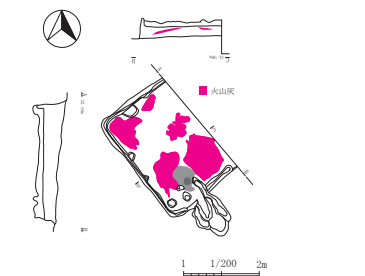
農道10号 第2号建物跡 ab



農道27号 第6号竖穴住居跡



農道9号 第1号竖穴住居跡



農道10号 第8号竖穴住居跡

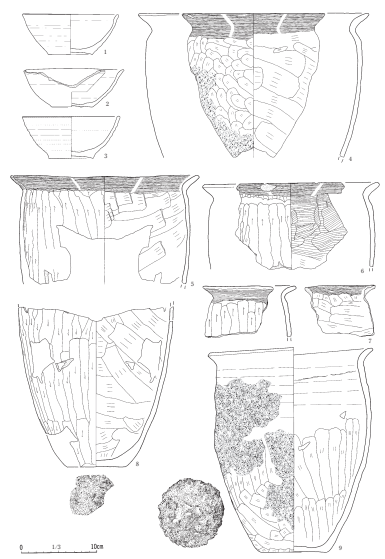
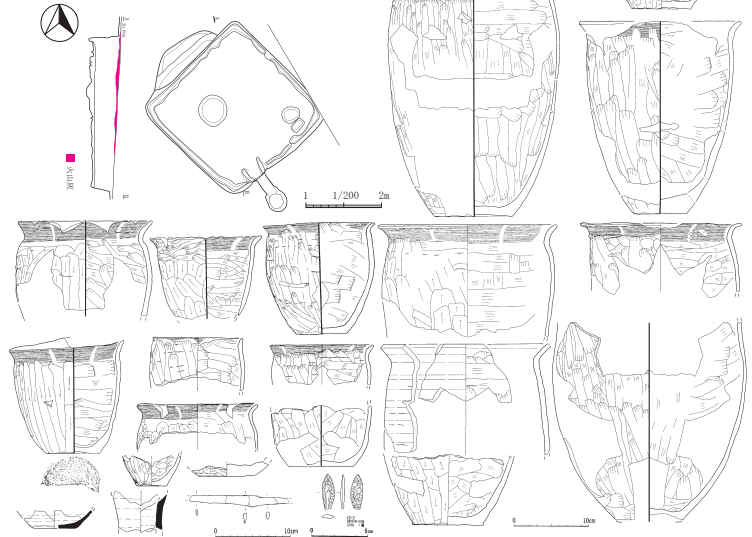


図142 火山灰堆積状況からみた竖穴住居等集成図 (2) 灰3期

第1章 調査の概要
 第2章 地形・基本層序
 2号 平成26年度調査
 27号 平成27年度調査
 28号・1号
 1号 平成25年度調査
 29号 平成29年度調査
 30号
 第5章 理化学的分析
 第6章 分析と考察
 まとめ

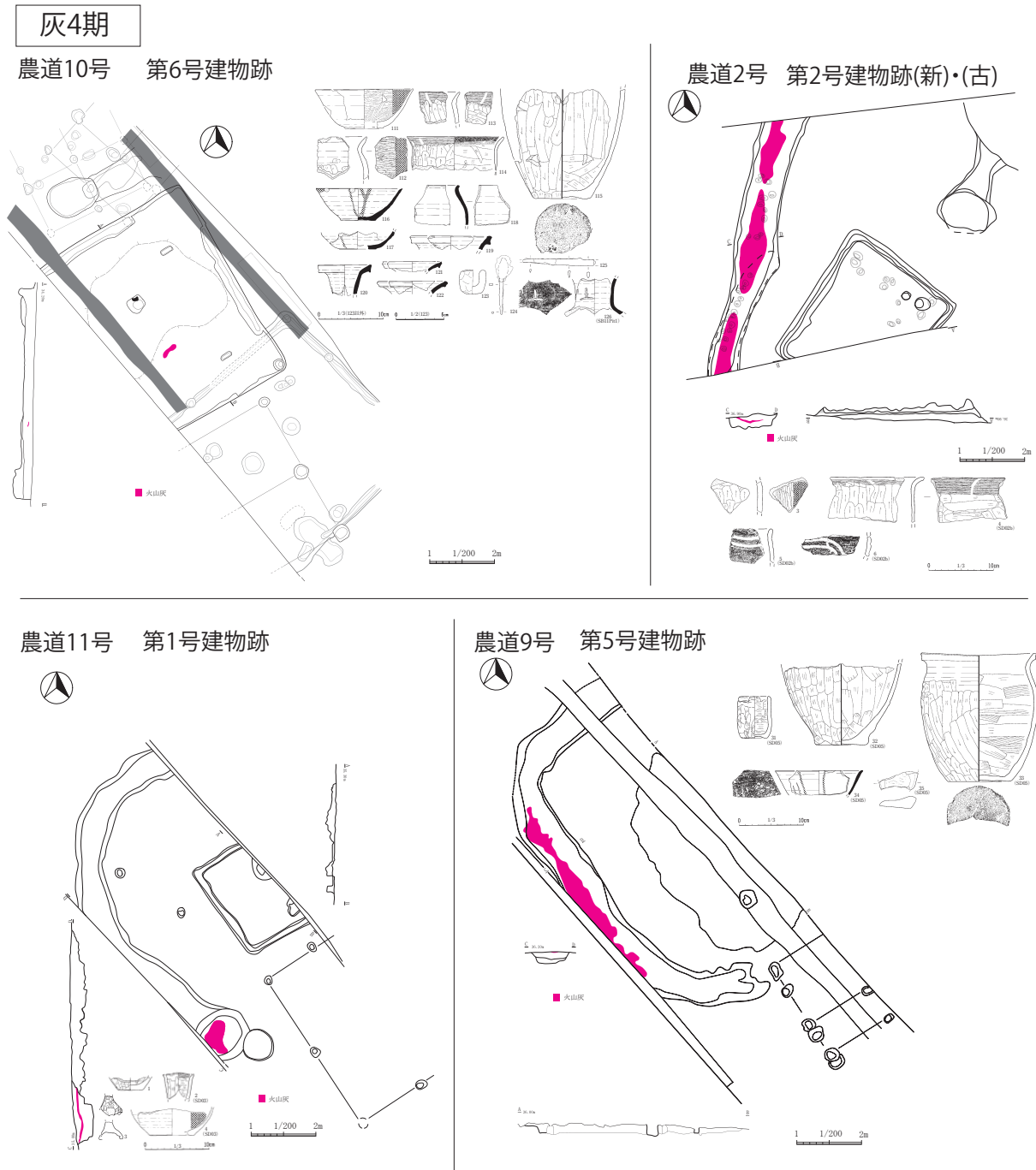


図143 火山灰堆積状況からみた竪穴住居等集成図 (3) 灰4期

農道11号-1号竪穴 (古・新)、3号竪穴 (古・新)、5号竪穴 (古・新)、2号竪穴 (古・新)

農道29号-*1号竪穴 (古・新)

*…火山灰との前後関係がわかるもの

これら建て替えの特徴として、床面積は狭いものから広いものへと、そしてしっかりした深い掘り込みからやや深い掘り込みへと造り替えられていることがいえる。床面積の多寡は、居住・使用する目的、用途、必要面積に左右されると見込まれるが、掘り込みの深さに関わる居住空間の大きさは上屋の構造・規格等で調整することが可能と推測できることから、労力の増減を伴う掘り込みの深浅は時期的推移を反映している可能性があると考えられる。

3 建物・竪穴住居の分類

1で火山灰との前後関係のわかる建物・竪穴住居の時期的変遷、2で建て替え時に竪穴を浅いものへと改築したことを把握した。これらのことから竪穴住居の構造は、①掘り込みの深さ、②壁溝の有無、の2点が時期的遷移によって影響を受ける要素ではないかと仮定できる。そこで、掘立柱建物跡や外周溝の有無にかかわらず竪穴住居部分のみに着眼して、以下のように竪穴住居を分類した。

①掘り込みの深さ

遺構確認面（漸移層＝Ⅳ層、以下同じ）より概ね10cm以上しっかり掘り込んで床面を作っているものを「深」、遺構確認面から概ね10cm以内の浅い面で床面を作っているものを「やや深」、概ね遺構確認面レベルで床面が検出されているものを「浅」とした。主観的要素を多分に含んでいることをお断りしておく。

表 46 竪穴住居の群別属性表

	壁溝	なし	あり
掘り込み			
深い		深A群	深B群
やや深い		やや深A群	やや深B群
浅い		浅A群	浅B群

②壁溝の有無

「なし」「あり」で区別し、壁溝のないものを「A」、壁溝のあるものを「B」とした。

この2点をもとに表46のように群別し、火山灰との前後関係で捉えた灰1期から灰4期までの時期区分がつかめているものを表45及び図141～143にまとめた。

さらに各住居群の時期別消長を表47にまとめてみたところ、古い時期では深く掘り込まれる竪穴住居が多いが、新しくなるにつれて掘り込みが浅くなるということが見て取れる。また、同じ深さでも壁溝のある竪穴住居の方がより後の時期まで使われることもわかる。ただし灰2期にある浅B群の農道7号1竪穴は、遺構の重複関係によって灰2期としたものだが、灰3期に近いものと考えられる。

表 47 火山灰との前後関係が分かる建物・竪穴住居の時期区分

火山灰を基にした時期区分	深A群	深B群	やや深A群	やや深B群	浅A群	浅B群	火山灰の降下時期
灰1期	3	—	—	—	—	—	
灰2期	1	4	1	3	—	1	
灰3期	3	4	—	2	—	—	To-a 降下?
灰4期	—	1	—	—	1	2	B-Tm 降下?

4 火山灰との前後関係が不明な建物・住居の分類

中平遺跡で検出された建物・竪穴住居のうち、火山灰との前後関係がわからないものについても、3の分類基準に則って分類・集成し、表49と図144～151に示した。なお出土遺物のないものなど、図版には掲載していないものがあることをお断りしておく。各住居群の特徴等は以下のとおりである。

深A群 しっかりとした深い掘り込みを有し、壁溝のない竪穴住居。12棟あるが大半の竪穴住居には柱穴がなく、掘立柱建物とセットになるものは農道27号1建物の1棟だけである。また、廃絶時に焼失しているものや埋め戻されているものが多い。

深B群 しっかりとした深い掘り込みを有し、壁溝のある竪穴住居。棟数が最も多く17棟あり、掘立柱建物とセットになるもの、もしくは掘立柱建物・外周溝とセットになるものがほとんどである。

単独の竪穴住居も調査区外に掘立柱建物が存在する可能性もある。

柱穴は、内柱・隅柱・壁柱を組み合わせるものが主体となっており、柱穴がないものは少数である。主柱穴には長方形の掘り方を有するものがあって、板材を用いていたと思われるものが5棟ある。また、廃絶時に深A群は覆土上位まで埋め戻されているものが多いのに対し、本群では中位以下まで埋め戻し、上位が自然堆積しているものが多い。焼失しているもの、廃絶直後から自然に堆積しているものも少数ある。

やや深A群 やや深い掘り込みを有し、壁溝のない竪穴住居。本群は3棟だけである。いずれも柱穴は見つかっておらず、単独の竪穴住居である。廃絶時は埋め戻されている可能性が高い。

やや深B群 やや深い掘り込みを有し、壁溝のある竪穴住居。柱穴は、内柱・隅柱・壁柱を組み合わせるものが多いが、見つからない竪穴住居もある。建物構成は、竪穴住居単独のもの、ピット列を伴うもの、掘立柱建物・外周溝とセットになるものがある。廃絶時は、焼失及び埋め戻されるものと、自然堆積するものとがほぼ半数である。建て替えが認められる農道1号2建物(図150)は、古い時期は「やや深A群」の単独の竪穴住居であるが、建て替えによって掘立柱建物・外周溝を伴う建物となり、それに加えて土坑・排水溝も伴ったものに改築した可能性が高い。

浅A群 浅い掘り込みで床面が遺構確認面付近レベルにあるもので、壁溝のない竪穴住居。柱穴は、ないものと隅柱・壁柱の組み合わせられるもので構成され、内柱のあるものは1例のみである。建物構成は、単独の竪穴住居、掘立柱建物・外周溝とのセットがあるものの、掘立柱建物とのセットはない。廃絶時は、掘り込みが浅いため不明なものも多いが、埋め戻しは少なく放置されて自然に堆積していくものが多い。

浅B群 浅い掘り込みで床面が遺構確認面付近レベルにあるもので、壁溝のある竪穴住居。4棟だけで、柱穴のないものと内柱・隅柱の組み合わせるものがあり、壁溝を使うものはない。掘立柱建物・外周溝は伴わず、単独の竪穴住居のみである。廃絶時は放置され自然堆積するものがほとんどである。

5 中平遺跡の建物変遷と時期

1において火山灰との前後関係が把握できる遺構について灰1期～灰4期に区分したが、中平遺跡では火山灰降下後の遺構も存在するとみられる。したがって中平遺跡の時期区分としては灰1期～灰4期をそれぞれ第1期～第4期とし、火山灰降下後を第5期として考えることとする。

4で群別した各住居群が、それぞれある程度の時間幅をもっていると考え、3で導き出した各住居群の消長にもとづいて、中平遺跡で検出されたすべての住居を第1期～第5期に振り分け、群別消長を表48にまとめた。また各時期の特徴を以下にまとめるが、第1期～第4期の特徴はすでに述べた灰1期～灰4期の特徴とほぼ重複するため、ここでは概略のみ述べることとする。

第1期 地山をしっかりと掘り込んで住居・床面を構築するが柱穴のないもので、6棟ある。廃絶から火山灰降下まで相当の期間を有する時期(9世紀前葉?)と思われる。

第2期 しっかりと地山を掘り込んだ住居11棟、やや掘り込んだ程度で床面を作る住居7棟、遺構確認面レベルで床面を作る浅い住居3軒と混在する。壁溝があるものが増える。柱穴はほとんど見あたらないが、壁溝があるものでは数基程度柱穴が作られるものもある。この時期に掘立柱建物跡とセットになる建物跡が出現しはじめる。時期的には火山灰降下まで一定の期間を有する時期(9世紀中葉?)と思われる。

第3期 29棟あり、しっかりと地山を掘り込んだ住居20棟、やや掘り込んだ程度で床面を作る住居8棟、浅い住居1棟がある。壁溝はないもの10軒、あるもの19軒で、壁溝のあるものが凌駕する。壁溝がないものには柱穴はあまり用いられないが、壁溝があるものでは隅柱・壁柱が用いられ、明確な内柱も出現する。そしてこの時期に掘立柱建物跡とセットになる建物が定着し、初源的な外周溝が作られる。当期には該当する棟数が多く構造にも多様性がみられることから、9世紀後葉頃からTo-aが降下する前後の時期（9世紀後葉～10世紀初頭？）までの広い時間幅を有しているものと考えられる。したがって本期は単独の堅穴住居を主体とする前半期と掘立柱建物を付属する後半期に大別できる可能性があって、終末期にはTo-aが降下して初源的な外周溝を付属する、という変遷が想定できる。

第4期 しっかりと深く掘り込むもの7棟、やや深く掘り込むもの2棟、浅い掘り込みのもの5棟で、浅いものが増え、掘り方のみ検出される例もある。壁溝を有するものが多く、主柱穴は内柱タイプが多くなり、主柱として板材を用いるものがある。最も特徴的なのが、堅穴住居に加えて掘立柱建物・外周溝がセットになるものが主体となることである。堅穴住居部分に火山灰は検出されておらず、外周溝にのみ検出されていることから、火山灰降下時に居住（使用）されていた可能性が高い。したがって本期は、B-Tmが降下する時期（10世紀前葉～中葉？）と思われる。

第5期 掘り込みがやや深いもの1棟、掘り込みが浅いものが6棟で、浅A群に分類された建物・堅穴住居が中心になると思われ、第4期に引き続き堅穴住居・掘立柱建物・外周溝のセットが継続して本期でも使用されるが、単独の堅穴住居も再び造られる。壁溝のないものには壁柱が用いられ、壁溝のあるものは柱穴がないものと、内柱・隅柱・壁柱を組み合わせるものがある。本期はB-Tm降下以後の時期（10世紀後葉？）と思われる。

集落としてはTo-a降下前の第3期がピークで、B-Tmが降下した後、しばらく集落は維持されるものの、10世紀後葉には消滅するものと考えられる。

第3期の小規模な外周溝から第4期の大規模な外周溝へと造り替えている例が農道2号2建物(古・新)及び農道10号1建物（a・b）にみられ、このことは火山灰の降下と同調するものと考えられる。To-aの降下時では小規模な外周溝で十分な効果（排水・防水等？）を得られていたが、大規模な噴火であるB-Tmの降下によって生じる天候不順には不十分であったため、第4期のB-Tm降下時に排水・防水効果を高めるため大規模な外周溝に造り替えたものと推測される。

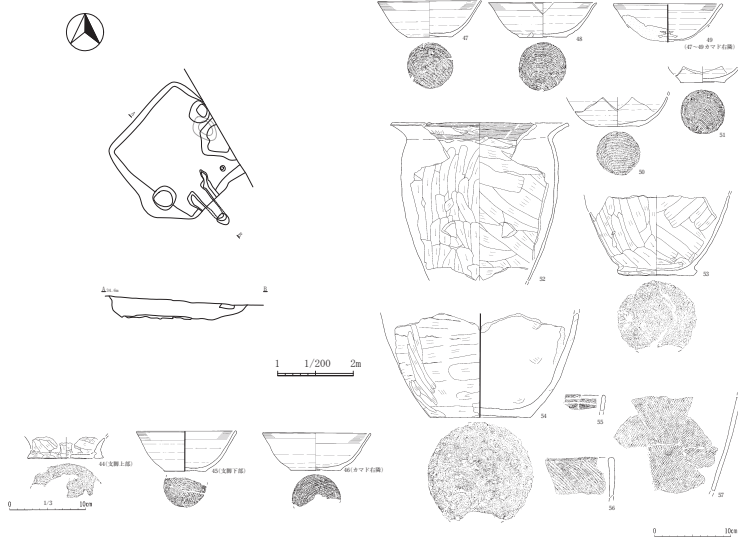
表 48 中平遺跡で検出されたすべての建物・堅穴住居の時期分類

中平遺跡での時期区分	火山灰を基にした時期区分	深A群	深B群	やや深A群	やや深B群	浅A群	浅B群	火山灰の降下
1期	灰1期	6	-	-	-	-	-	
2期	灰2期	5	6	2	5	-	3	
3期	灰3期	8	12	2	6	1	-	To-a 降下?
4期	灰4期	-	7	-	2	2	3	B-Tm 降下?
5期	-	-	-	-	1	5	1	

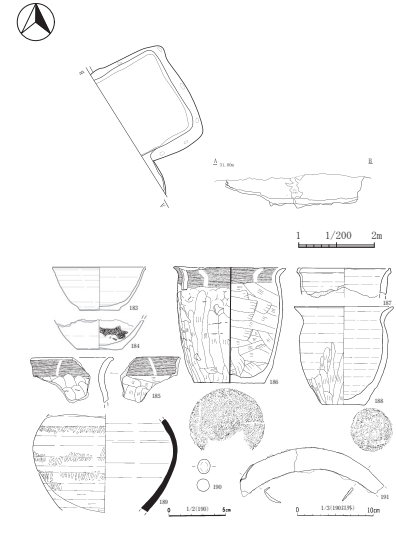
第1章 調査の概要
第2章 地形・基本層序
2号 平成26年
27年度 調査
28号・1号
1号 平成25年
29年度 調査
30号
第5章 理化学的分析
第6章 分析と考察
まとめ

深A群

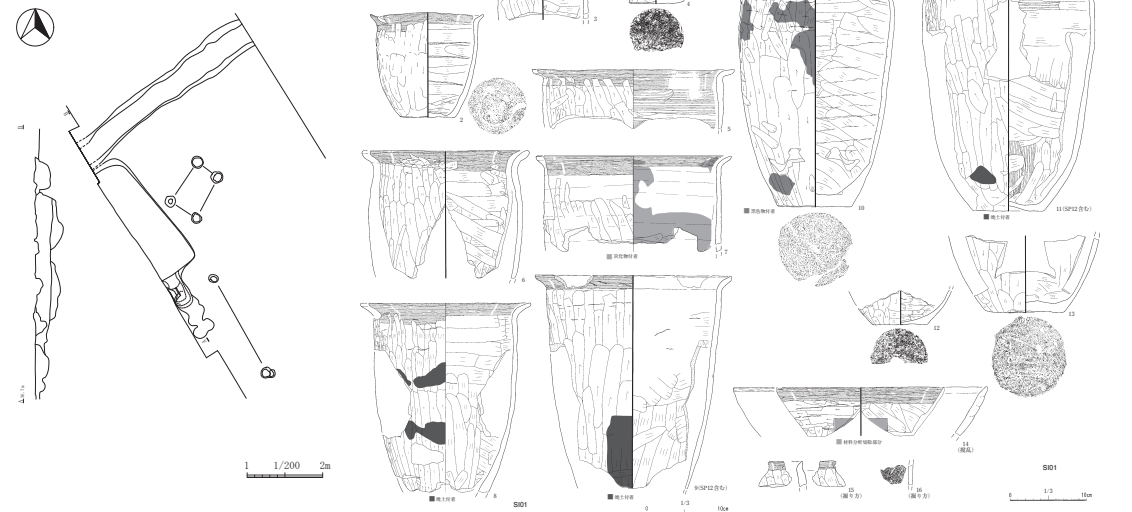
農道25号 第5号竖穴住居跡



農道10号 第9号竖穴住居跡(新)(古)



農道27号 第1号建物跡



農道28号 第5号竖穴住居跡

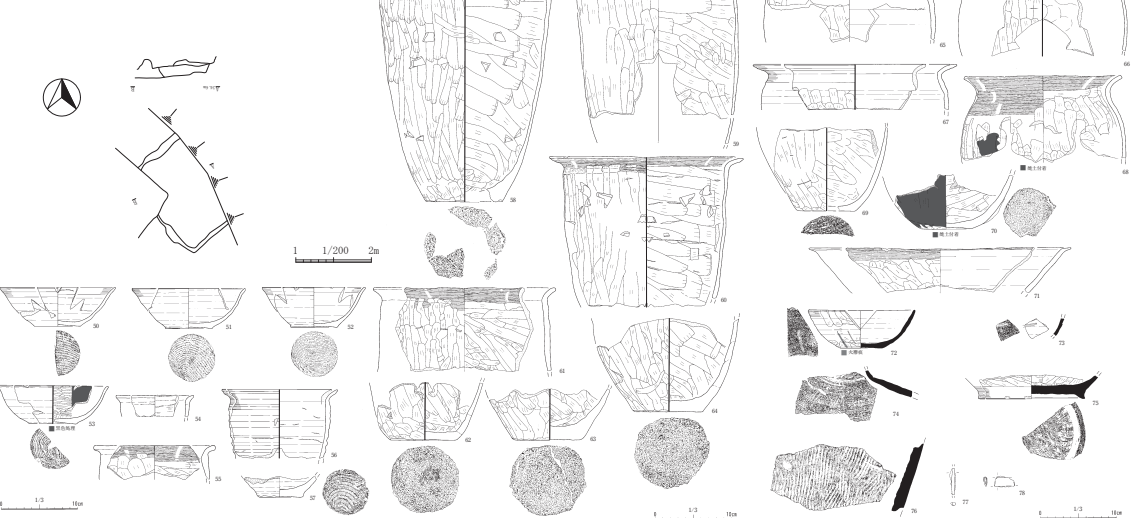


図144 竖穴住居等群別集成図 (1) 深A群

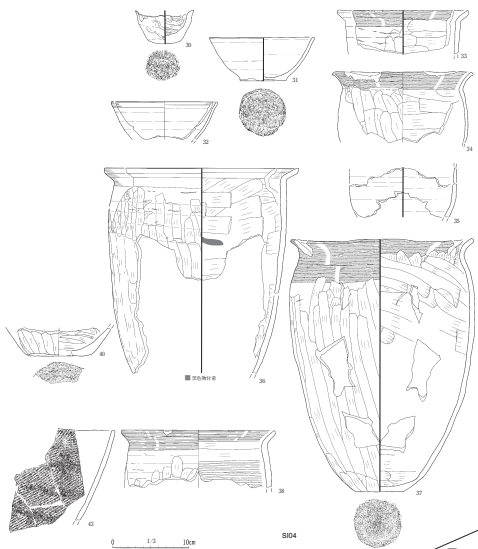
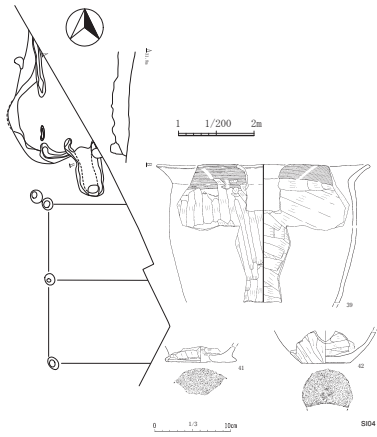
第1章 調査の概要
 第2章 地形・基本層序
 2号 平成26年度調査
 27号 平成27年度調査
 28号・1号 平成25年度調査
 1号 平成29年度調査
 30号 平成30年度調査
 第5章 理化学的分析
 第6章 分析と考察
 まとめ



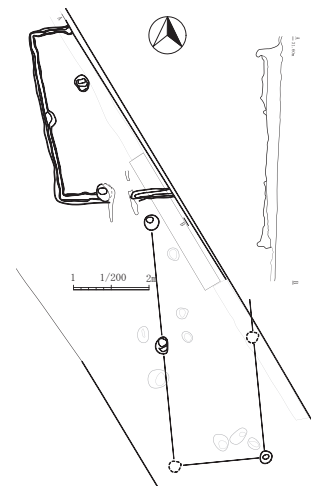
図145 竪穴住居等群別集成図 (2) 深A群

深B群

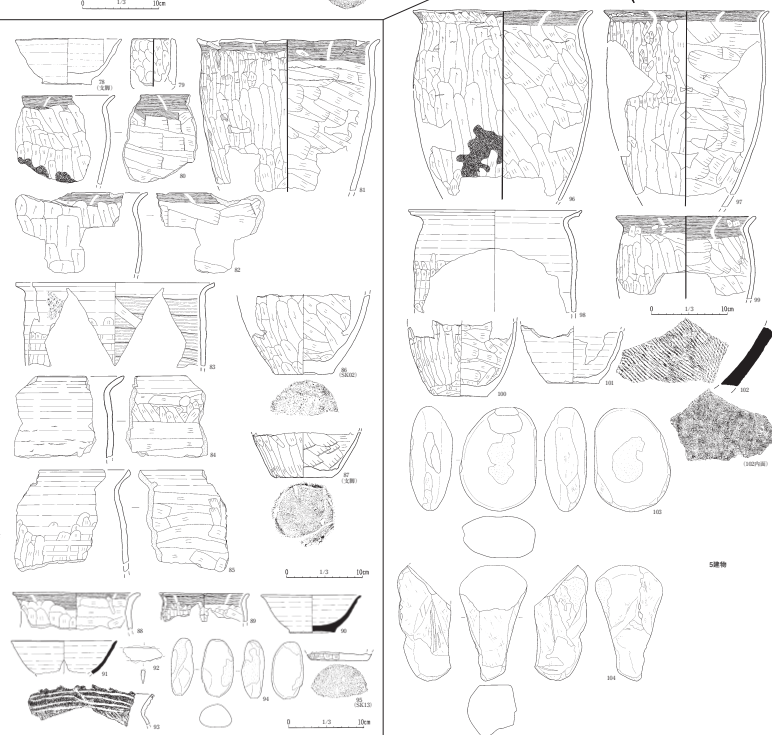
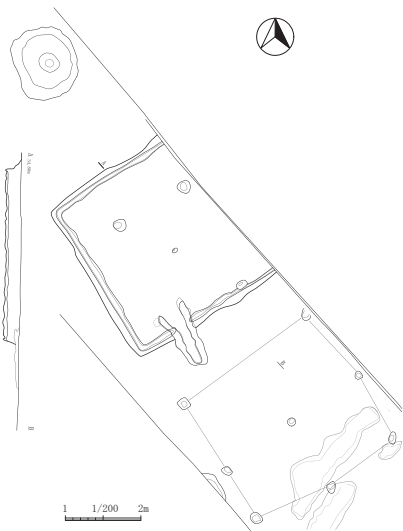
農道25号 第4号建物跡



農道10号 第5号建物跡



農道10号 第4号建物跡(新)(古)



農道10号 第7号建物跡

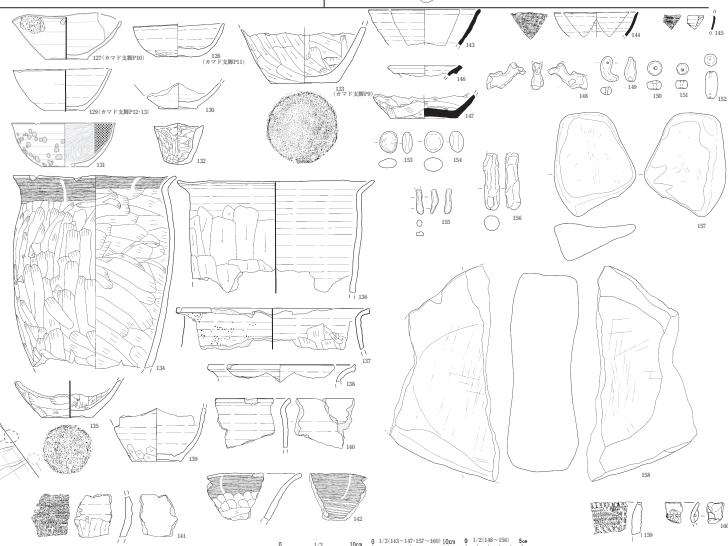
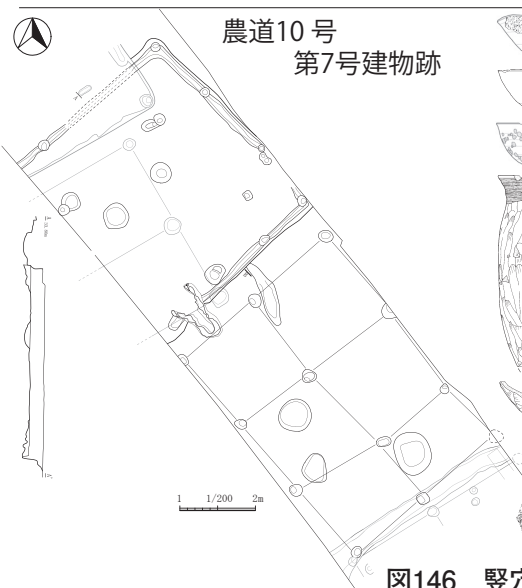
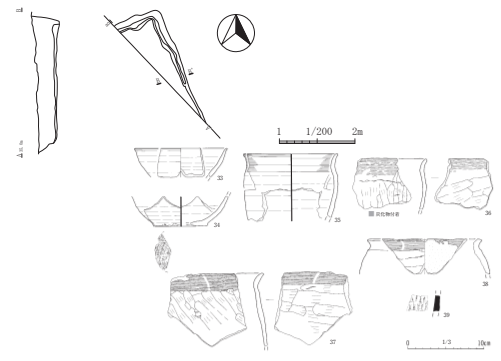


図146 竪穴住居等群別集成図 (3) 深B群

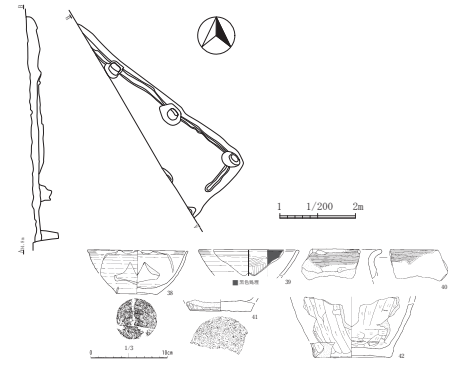
第1章 調査の概要
 第2章 地形・基本層序
 2号 平成26年度調査
 27号 平成27年度調査
 28号・1号 平成28年度調査
 1号 平成25年度調査
 29号 平成29年度調査
 30号 平成30年度調査
 第5章 埋蔵物の分析
 第6章 分析と考察
 まとめ

深B群

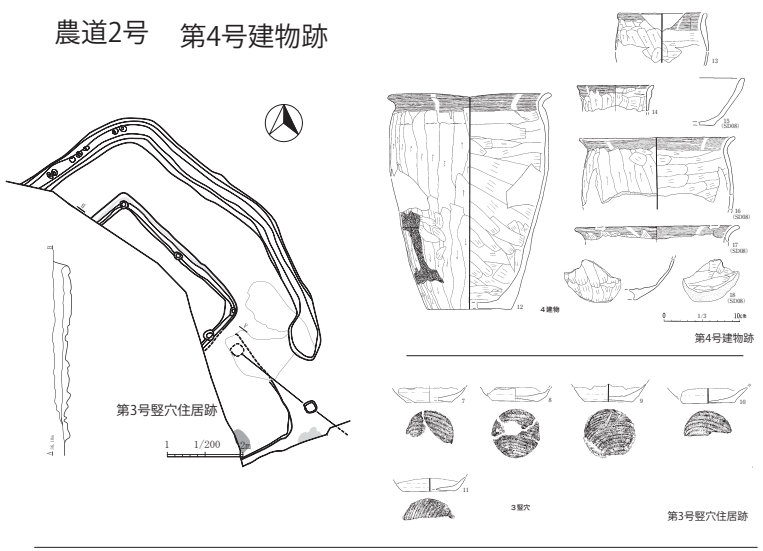
農道30号 第4号竖穴住居跡



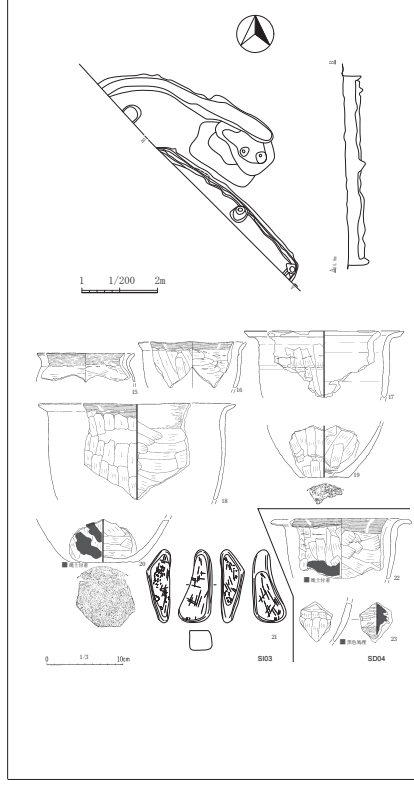
農道28号 第3号竖穴住居跡



農道2号 第4号建物跡



農道29号 第3号建物跡



農道10号 第1号建物跡 ab

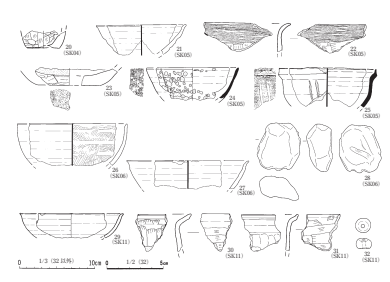
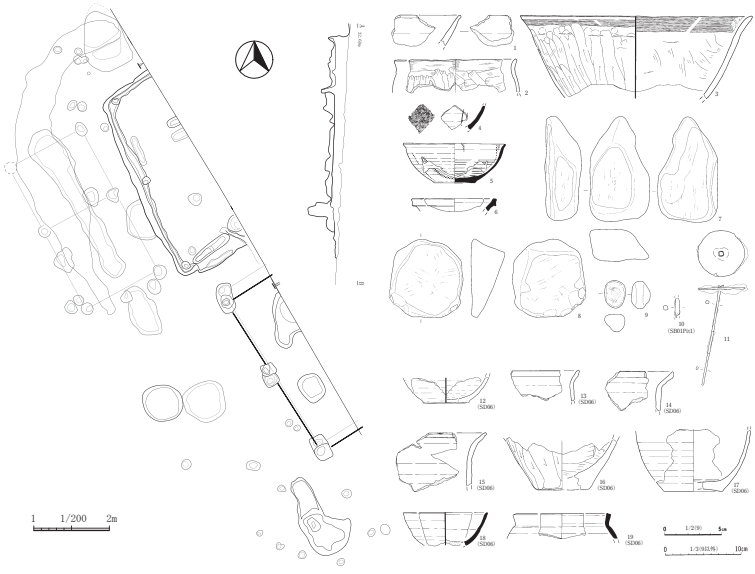
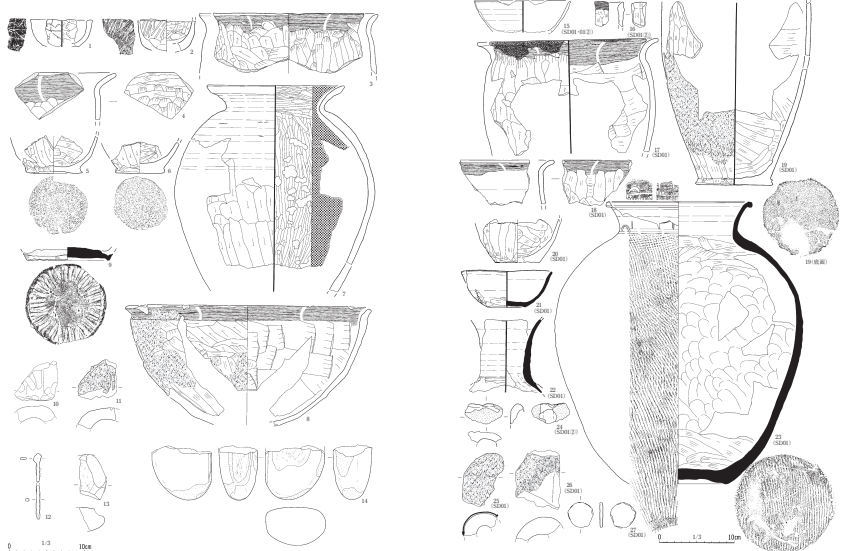
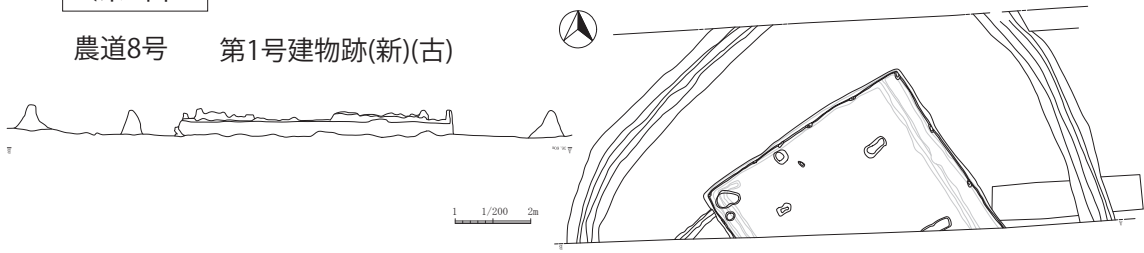


図147 竖穴住居等群別集成図 (4) 深B群

深B群

農道8号 第1号建物跡(新)(古)



農道2号 第5号建物跡

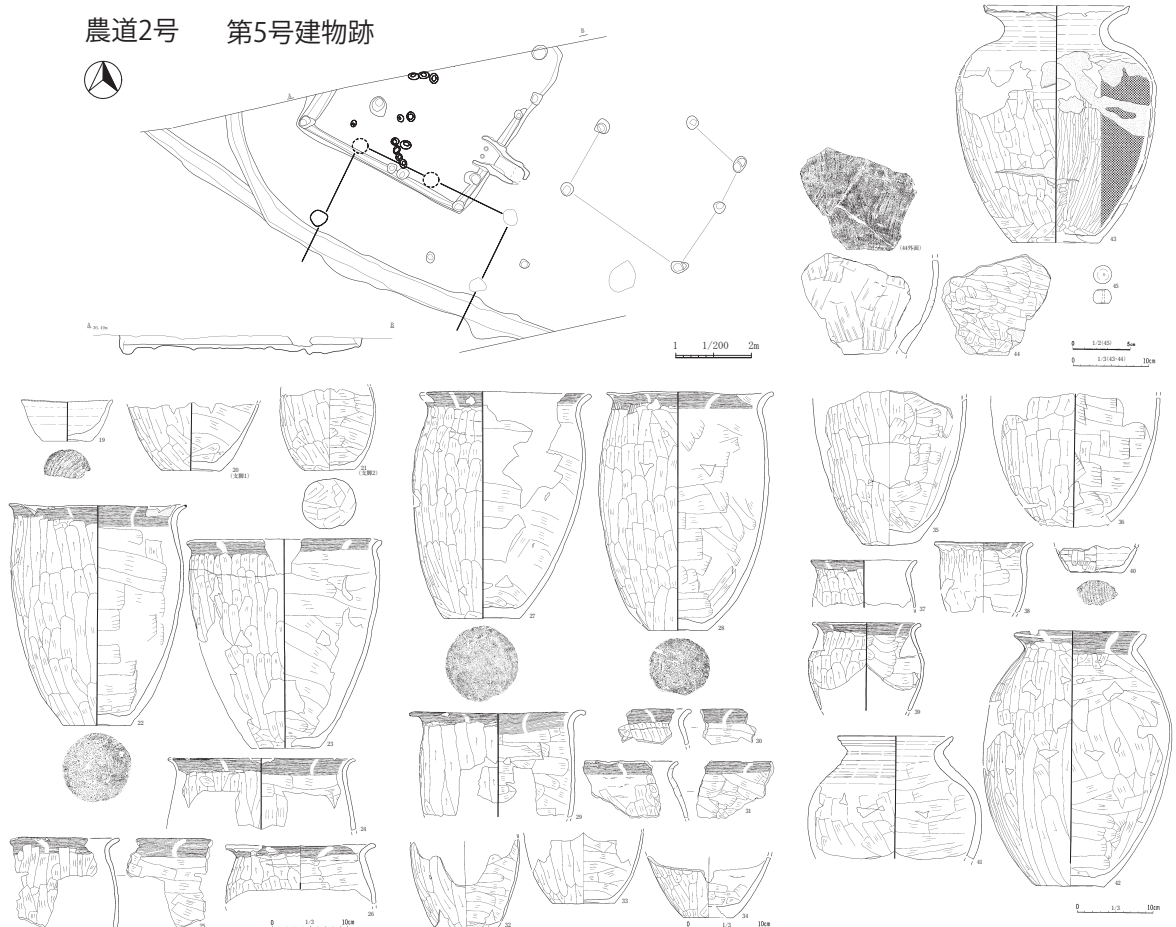
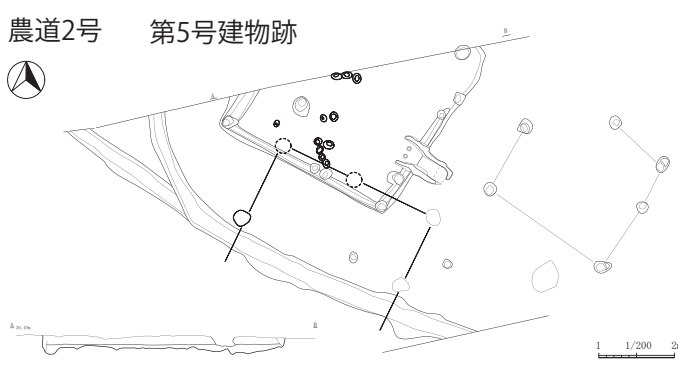


図148 竪穴住居等群別集成図 (5) 深B群

第1章 調査の概要
 第2章 地形・基本層序
 2号 平成26年度調査
 27号 平成27年度調査
 28号・1号
 1号 平成25年度調査
 29号 平成29年度調査
 30号
 第5章 物理化学的分析
 第6章 分析と考察
 まとめ

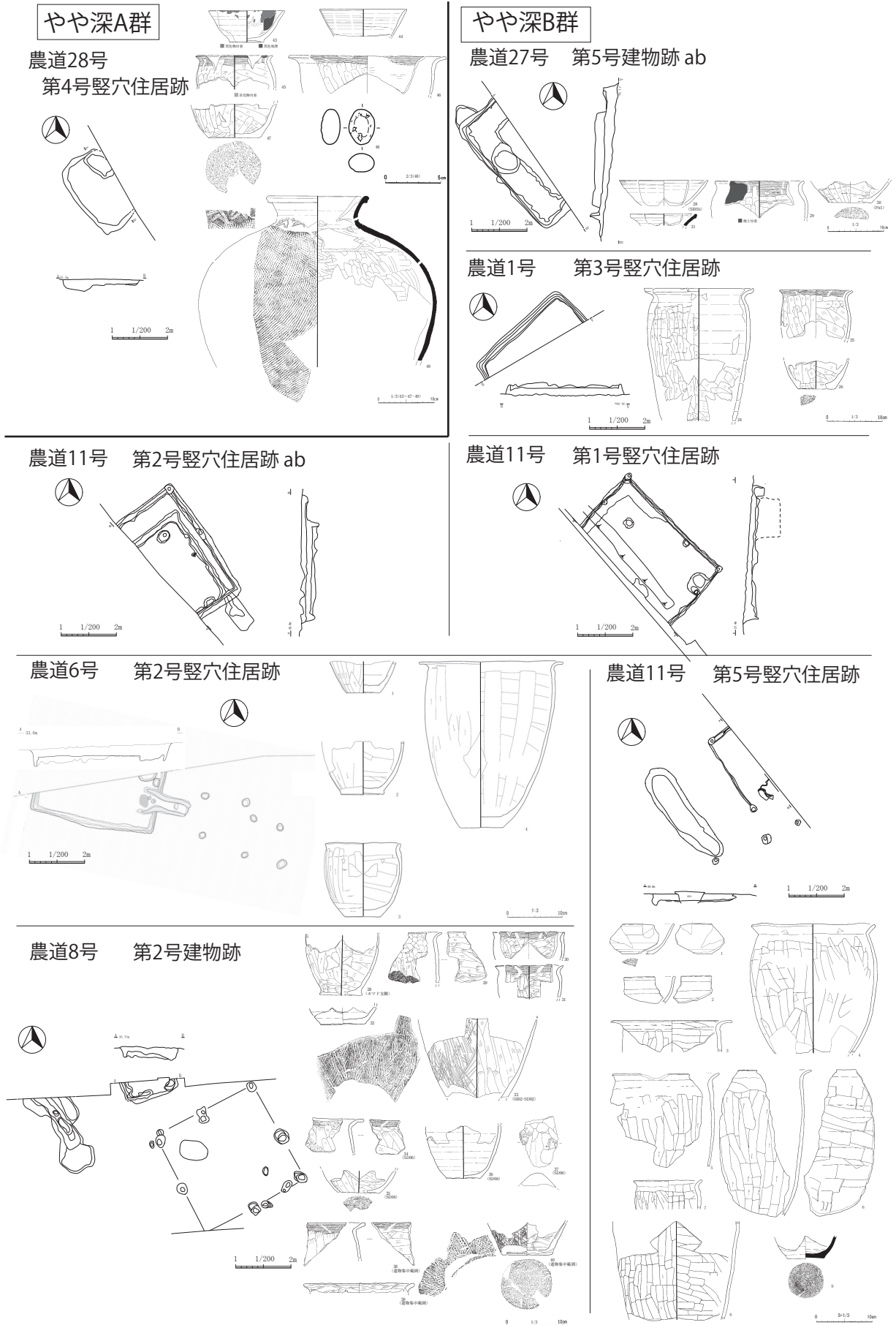
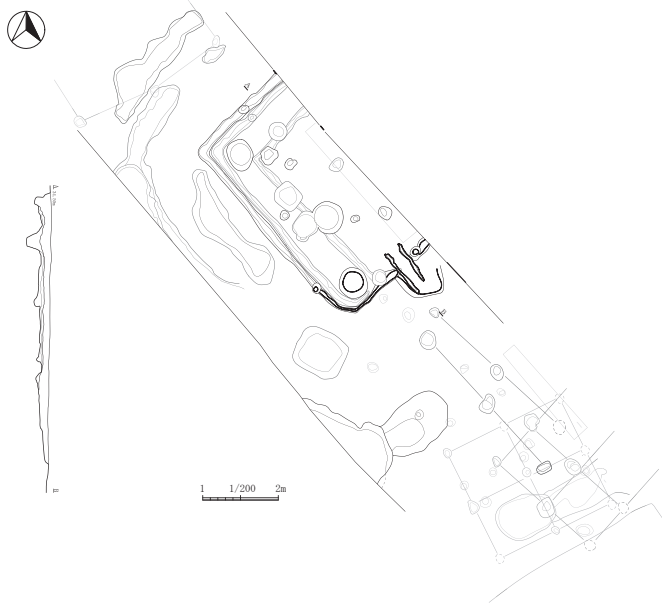


図149 竖穴住居等群別集成図 (6) やや深A群・やや深B群

やや深B群

農道10号 第3号竖穴住居跡 ABC



農道1号 第2号竖穴住居跡(新)(古)

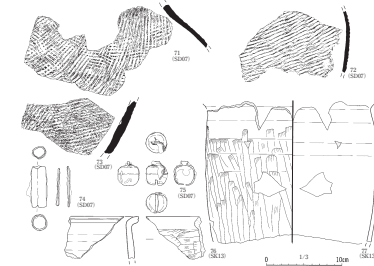
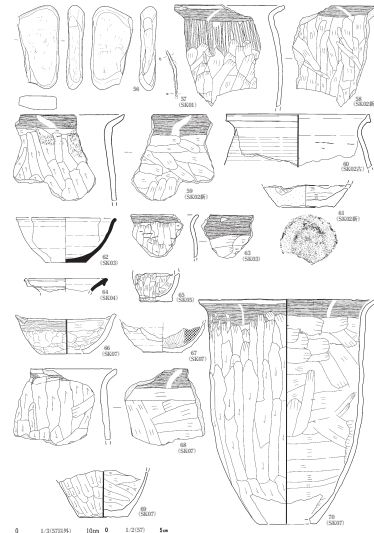
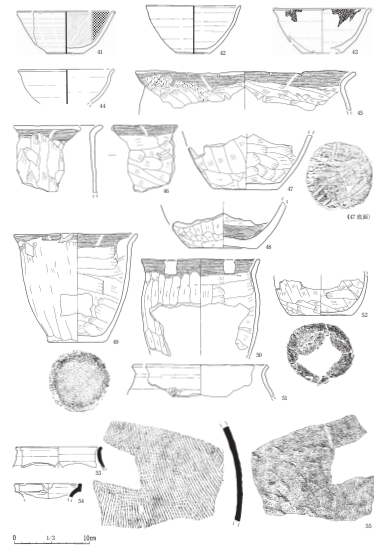
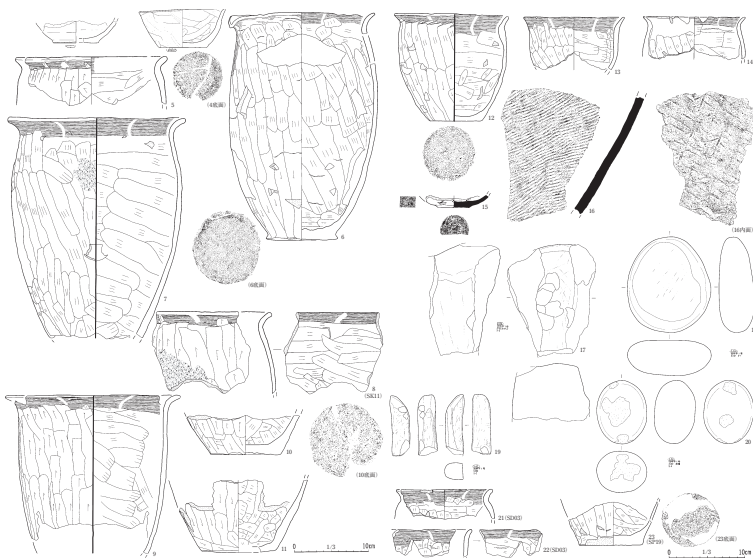
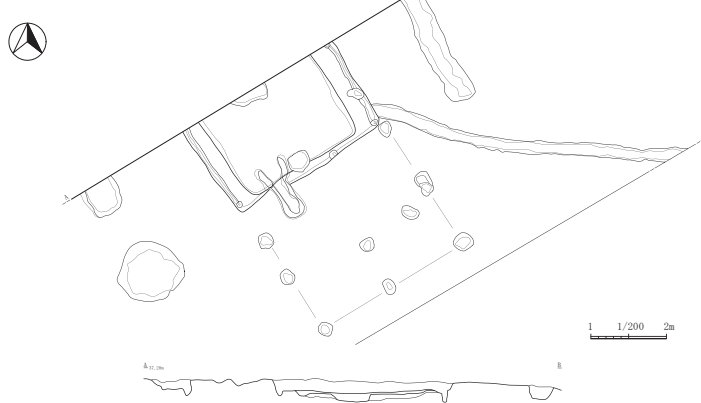


図150 竖穴住居等群別集成図 (7) やや深B群

第1章 調査の概要
 第2章 地形・基本層序
 2号 平成26年度調査
 27号 平成27年度調査
 28号・1号
 1号 平成25年度調査
 30号
 第5章 理化学的分析
 第6章 分析と考察
 まとめ

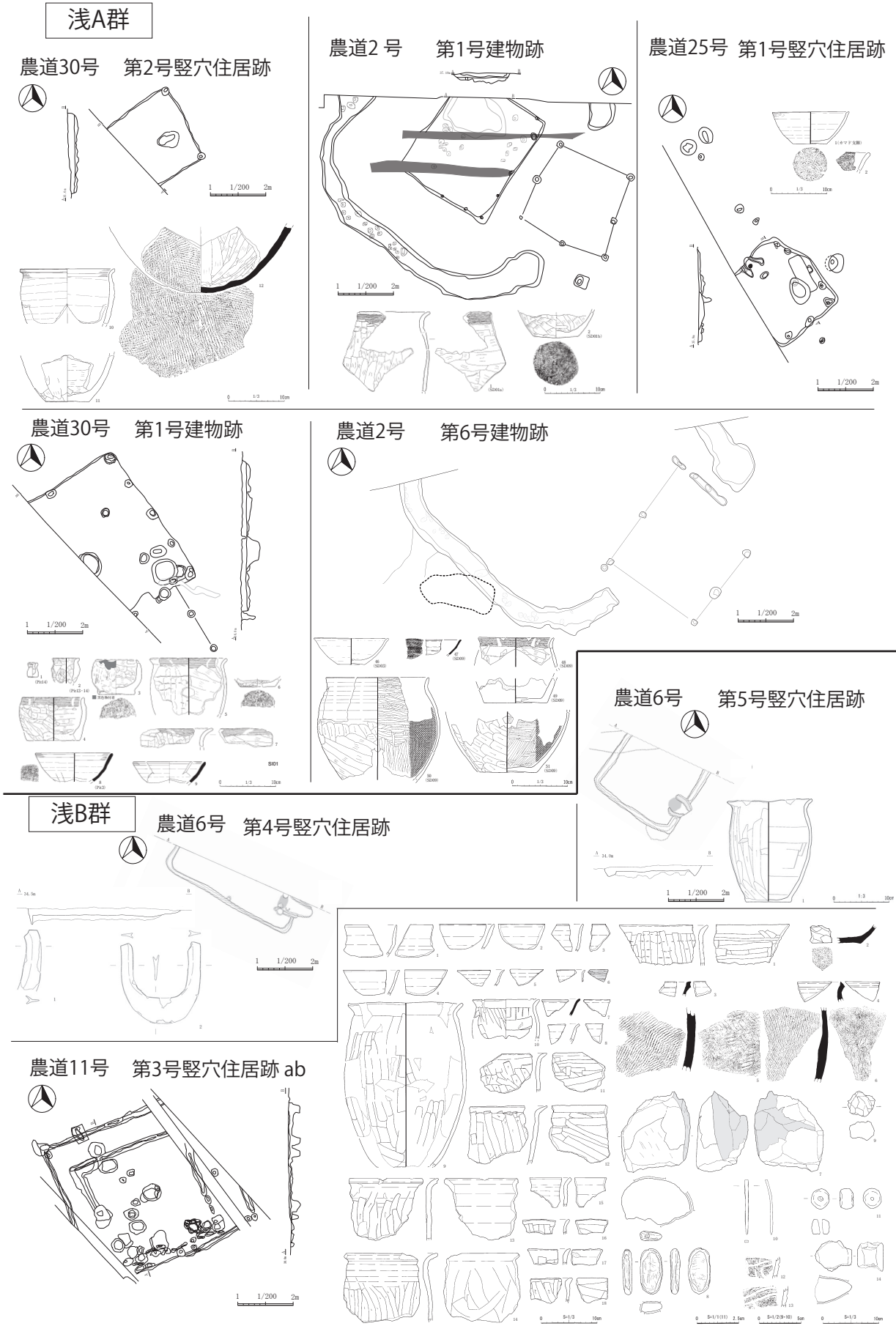


図151 竖穴住居等群別集成図 (8) 浅A群・浅B群

6 建物変遷の問題点と課題

竪穴住居構造に関する火山灰降下時までの大きな流れとしては、掘り込みの深いものから浅いものへ、壁溝のないものからあるものへと移り変わり、To-aが降下する前に掘立柱建物が付属し、火山灰の降下に伴って外周溝がさらに付属するという変遷がたどれ、外周溝は火山灰の降下時期とリンクする可能性が高いということも推測できた。しかし、掘立柱建物が竪穴住居に付属する意味や機能は明らかになっておらず、火山灰降下後の竪穴住居構造も明瞭につかむことができていない。

竪穴住居の柱穴配置は本来であればもっと踏み込んで分類できるはずであるが、幅6ないし8mの調査区では竪穴住居内部を全面調査できることは少なく、限られた一部を調査しているだけである。このことは掘立柱建物やカマドなど付属施設についても同様で、遺構の部分的な精査という制限の中、これ以上は憶測の度合いが増すばかりであることから建物等の構造変遷の模索はここで終える。

出土土器類に関して次節で詳細を述べるが、個々の遺物をみれば時期差は認められるものの、建物・竪穴住居ごとのまとまりとしてみた場合、明瞭な時期差を見出すことができないくらい近接した時間枠で建物・竪穴住居が移り変わったものと思われる。また外周溝から出土した遺物に関しては、溝として機能していた時も廃絶された後も遺構と関係のない時期の遺物が混入することが多く、遺構との同時性を識別・把握した上で検討する必要があるが、ここでは時間的制約からその手順を踏めなかったことが遺物の時期差を見えにくいものになっている要因のひとつである可能性がある。

報告書での事実記載では遺構の形状・重複関係だけでなく遺物を含めて時期判定するため、往々にして遺構の存続期間が広めに想定される場合が多い。またこれまでの多方面からの研究成果によって土器の編年表が編まれており、ここで述べた時期とは齟齬をきたしている可能性がある。青森県内における遺物の絶対年代観は、他県（他地域）における年代観の援用であったり、遺物の形状・特質等を相対的に前後関係で並べたものが多く、絶対的年代観を有している資料は少ない。また生産地と消費地における時期差がどれくらいあるのか、土器の耐用年数がどれくらいあるのか、カマド支脚として使用された土器は器としての使用期間と支脚としての使用期間はどれくらいあるのか、などなど多くの不確定要素を含んでおり、遺構の使用された年代を導き出す場合、よほど良好な資料でなければ事実誤認する可能性が高いと思われる。

平安時代の火山灰降下年代は、十和田 a 火山灰 (To-a) が西暦915年、白頭山苦小牧火山灰 (B-Tm) が西暦926年、936年、937～938年、939年、947年、969年、1039年と諸説あって、両火山灰とも降下年代が変わる可能性がある。したがってここでは、降下火山灰との相対的な時期で捉えることに努めた。火山灰の年代観が変わればここで示した時期（絶対年代）も変わることを申し添えておく。

ここでは火山灰の堆積状況をもとに竪穴住居構造の変遷を辿り、それをもとにすべての建物跡等を類型化して帰属時期を想定したものである。出土遺物の時期は加味していないため、遺構と遺物で時期差が生じている可能性があるが、時期差があるものについては遺物の出土状況や遺構の存続期間などさらなる検討が必要であろう。またここでは5期の時期区分を用いて建て替えのある建物等も各期に振り分けたが、時期ごとに一斉に遺構を建て替えるわけではなく、使用期間が短く同一時期に属する建物等が存在する可能性もあり、各住居がそれぞれどれくらいの時間幅をもって存在していたのか、という点も視野に入れる必要がある。

第3節 建物跡等出土遺物の時期別様相

ここでは第2節で導き出された建物等の時期区分に沿って、各時期の特徴を表す遺物を中心に概略を述べていく。なお五所川原産須恵器の窯跡名及び観察については、『五所川原須恵器窯跡群』（五所川原市教育委員会2003年）の窯跡名及び分類に基づいている。

第1期の出土遺物－土師器

第1期の遺構から出土する遺物量は少ない。土師器は甕で、器高が30cm前後の甕と15cm前後の小甕に大別できる。前者は底部のみであり、底面は砂底である。後者はロクロ成形で体部下半にナデ？（摩滅により不明）を施すものである（図24－20・21）。

第2期の出土遺物－土師器、須恵器、土製品、金属製品

土師器の器種は坏、甕、小甕、埴、鉢、大鉢である。全般的に略完形に近い個体が多い。数量的には甕が多く、次いで坏、埴・鉢・大鉢である。坏は、腰部がやや凹み、高台を強調するようなのがみられる（農道10号第9号竪穴住居跡）。内面に黒色処理を施すものもある（図61－53、農道28号第5号住居跡）。甕は、器高が30cm前後のものとは15cm前後の小甕に大別でき、製作技法ではどちらも粘土紐巻き上げとロクロ成形があり、一般に粘土紐巻き上げ成形によるものは体部外面を頸部までナデ調整を施し、ロクロ成形のものは体部下半にナデまたはケズリ調整を施す。個体数は前者が多い。いずれの成形方法も、底面に砂が付着するいわゆる砂底もしくはヘラナデである。以上、土師器甕に関する技法の特徴は、本期以降第5期まで基本的に継続することから、以下の各時期ではこれら以外の特記事項のみ記すこととする。埴・大鉢は、直径35cm、器高15cm前後のものである。大鉢の形状は埴に類似し、内面に黒色処理を施すものである。

須恵器の器種は坏、壺、甕である。体部外面に刻印を持つ略完形の坏（図113－17、農道30号第3号竪穴住居跡）が出土している。高野・持子沢窯跡支群で生産された可能性がある甕の胴部片が出土している（図113－19）。土製品は土玉が出土している。金属製品は鎌（農道10号第9号竪穴住居跡）、鍬鋤先（農道6号第4号竪穴住居跡）、刀子の一部（図63－78、農道28号第5号竪穴住居跡）がある。

本時期の出土遺物は、金属製品の農耕具の一群が出土していることに特色がある。遺跡周辺の開拓行為を示すものかもしれない。

第3期の出土遺物－土師器、須恵器、土製品

土師器の器種は坏、壺、甕、小甕、埴、甗である。坏や甕は全般的に略完形に近い個体が多い。甕が多く、次いで坏だが少ない。坏は、器形がやや扁平なものと、腰部がやや凹み、高台を強調するようなのがみられる（図82－4・図86－31、農道25号第2・4号竪穴住居跡）。壺は、内面に黒色処理を施すものがある。埴は、農道27号1号竪穴住居跡から出土している。

須恵器の器種は、坏、壺、甕である。坏は略完形の個体が複数みられるが、壺や甕は少ない。坏は腰部がやや凹み、高台を強調するようなものがある（図89－35、農道10号第2号竪穴住居跡）。壺破片はI a類に分類され、MD 7・12号窯出土遺物に類似する（図28－31、農道27号第5号竪穴住居跡）。甕は農道28号第4号竪穴住居跡から出土しているものは（図59－49）甕II a類に分類され、口縁端面はMZ 6・7号窯やMD 7・12号窯の出土遺物に類似する。農道30号第2号竪穴住居跡の堆積土から出土した甕底部は（図111－12）、外面の叩き目から前田野目窯跡支群で生産されたもの

に類似する。土製品は土馬、土玉や鉢・小鉢を模したミニチュア土器がみられるが、特定の建物跡・堅穴住居跡から集中して出土する傾向がある（農道10号第7号建物跡、農道25号第4号堅穴住居跡）。他に内耳土器（農道10号第7号建物跡）や羽口も出土した。

本時期では、前時期で出土を見た土玉のような祭祀行為を示す遺物が増加することに特徴がある。

第4期の出土遺物－土師器、須恵器、土製品、石器、石製品、金属製品

土師器の器種は、坏、壺、甕、小甕、塙、鉢である。甕が多く、坏は少ない。坏は大振り器で器高が高く、内面に黒色処理を施すものがある。壺は、個体数が少ないが、肩部が最大径を測るいわゆるいかり肩で、口縁端面形が頸部から鋭角に外反し外側に面をとるもので、内面に黒色処理を施すものがある（農道2号第5号建物跡、農道8号第1号建物跡）。

須恵器の器種は坏、壺、甕である。坏は火襷をもつものがみられ、壺は口縁端部の形態が、MD7・12号窯跡出土壺I a類に類似する。甕は農道8号第1号建物跡で1個体が出土しており（第490集図41-23）、口縁端面形から甕I a類に分類され、MZ6・7号窯出土遺物に類似する。壺は菊花文底部破片が出土し（農道8号第1号建物跡）、口縁部破片は壺I・II a類に分類され、KY1またはMZ6・7号窯出土遺物に類似するものである（農道10号第6号建物跡）。土製品は少ないが、複数の建物跡から出土している。甕や鉢を模したミニチュア土器、土玉、土鈴がある。また、羽口が出土している（農道8号第1号堅穴住居跡）。石器・石製品では磨石・砥石が出土し、金属製品は刀子（農道10号第6号建物跡）や紡錘車が出土している（農道10号第1号建物跡）。

本時期の出土遺物の特徴は、内面に黒色処理を施す土師器の増加である。

第5期の出土遺物－土師器、須恵器、土製品、金属製品

土師器の器種は、坏、壺、甕、鉢である。比較的坏が多くみられ、坏は扁平なものと器高が高いものがあり、器高が低い扁平な器型もみられる（農道2号第6号建物跡）。また内面に黒色処理を施すものもみられ、体部は丸味を帯びる（農道10号第3号堅穴住居跡）。広口壺のロクロ成形の個体には、内面に黒色処理を施すものがある（農道2号第6号建物跡）。

須恵器の器種は坏、壺、甕である。壺はI a類に分類され、MD7・12号窯出土遺物に類似するものがある（農道10号第3号建物跡）。また、I・II b類に分類され、MZ6・7号窯のものに類似するものもある（農道11号第3号堅穴住居跡）。土製品は、壺や甕を模したミニチュア土器や土玉がある（農道10号第3号堅穴住居跡、農道11号第3号建物跡、農道30号第1号建物跡）。金属製品は、銅製鈴や円筒状鉄製品が出土している（農道10号第3号堅穴住居跡）。

本時期には前代に引き続き内面に黒色処理を施す土師器が使用されている。また、従来の祭祀に関する遺物のミニチュア土器や土玉のほかに銅製の鈴が出土しており、祭祀用具に変化がみられる。

まとめ

○平成21及び22年度のまとめ

縄文時代の遺構は土坑10基、焼土遺構5基、溝状土坑1基、平安時代の遺構は建物跡5棟、竪穴住居跡22軒、土坑59基、溝跡23条、掘立柱建物跡2棟、ピット82基、性格不明遺構1基、時期不明のものは土坑9基、溝跡1条、ピット36基、焼土遺構1基であった。遺物は段ボール箱36箱分が出土し、縄文時代早期・前期・中期・後期・晩期の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・石器・土製品・金属製品がある。

特筆すべき成果として土師器製作遺構と土師器焼成遺構の検出があげられる。

土師器製作遺構は、農道27号で検出された第2号建物跡と第7号竪穴住居跡である。2軒とも土師器の材料と思われる粘土が住居南東隅に作られたピットに貯蔵されていて、第2号建物跡では北西隅に、第7号竪穴住居跡では南東部にロクロを設置したロクロピットが検出された。いずれも帰属時期はTo-a降下前の時期と思われる。

土師器焼成遺構は農道27号で検出された第24・25・30号土坑で、土師器製作遺構である第2号建物跡から約30m、第7号竪穴住居跡からは約6m離れただけの地点である。これら焼成遺構からは焼土・炭化物が出土し、底面や壁の一部などが被熱していた。出土遺物はほとんどないが、第30号土坑からは土師器甕の破片が出土したことから、土師器甕の焼成遺構であったものと思われる。また、平成20年度に検出された農道2号第2号土坑も土師器甕の焼成遺構とみられ、これを含めて本遺跡からは4例の焼成遺構が見つかったことになる。

○4ヶ年（平成19～22年度）のまとめ

中平遺跡は梵珠山系の南西麓に広がる扇状地性の低位段丘上で、標高35～40mの緩やかな小丘地上に位置している。小丘地の南北には東西に延びる開析谷が存在し、北側の谷上流部と南側の谷が堰き止められ、それぞれ吉野田新溜池、熊沢溜池として現在利用されている。小丘地頂部はりんご園造成のために削平され、ほぼ平坦となっている。中平遺跡の一部は、葛西覧造氏や角田文衛氏らによって縄文時代後期の土器を出土する「吉野田タケハラコ」という名称で昭和初期から知られていた。

県営野沢地区畑地帯総合整備事業に伴う中平遺跡の発掘調査は平成19年度から4ヶ年にわたって行われ、検出した遺構数、遺物量等をまとめたのが表44である。農道14路線を調査したが、全体で約710,000㎡の広さを有する中平遺跡のうち、この4年間で調査したのは約20,000㎡、遺跡全体のわずか2.8%であった。一連の調査で特筆すべきは縄文時代後期の集落跡と平安時代の集落跡である。

縄文時代各時期の遺構・遺物が見つかったが、平成19年の農道6号の調査で見つかった後期前葉十腰内I式期の大規模集落の検出は大きな成果である。柱穴状の各種土坑を中心に一部は亀甲形の掘立柱建物跡を構成して全体的に環状をなすもので、詳細は青森県教育委員会第474集『中平遺跡』2009で報告されている。近年の調査ではそれを補足・発展させる当該時期の遺構・遺物が見つかっていないため、ここではその内容には言及しないこととする。

平安時代の集落については、およそ9世紀前葉から10世紀後葉までに収まるようで、特に9世紀後半から10世紀前半に集落の盛期がある。平安時代の建物跡29棟、竪穴住居跡47軒が検出され、これら以外にも建物跡を構成する外周溝と思われる溝跡もあり、密度はさほど濃くないが広い範囲に住居が点在していたことが窺える。比較的密度が濃い地点は、大きく2ヶ所挙げることができる。1ヶ所目は、遺跡南側にある熊沢溜池とその支谷に面する台地縁辺部である。ここでは9世紀前葉から10世紀後葉まで長い期間にわたって集落が展開する。土師器製作遺構や焼成遺構も検出され、集落内での土師器生産に関する新資料を得た。B-Tm降下前には、農道9号・10号・27号において円形周

溝や方形周溝が造られており、遺跡の中に小規模な墓域が点在していた。2ヶ所目は、遺跡中央部で北西から入り込んでくる支谷の沢頭周辺部である。ここでは農道2号・8号で、10世紀前葉から中葉の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・外周溝がセットになる建物跡が主に検出されている。これら以外では、農道6号・7号及び農道11号北側において掘立柱建物及び外周溝を伴わない単独の竪穴住居跡が散発的にみられるが、浪岡野沢小学校及びその西側の緩斜面地帯は調査が行われていないためその様相は不明である。4ヶ年で検出された建物跡や竪穴住居跡を分析したところ、まず単独の竪穴住居が造られ、To-a降下前に竪穴住居と掘立柱建物がセットになり、To-a・B-Tm降下によって竪穴住居・掘立柱建物・外周溝の建物へと変遷し、その消長にはTo-aやB-Tmの降下がリンクしている可能性が考えられる。住居構造の変化は時期差だけではなく、天候不順による降雨量（降雪量）増加等の気候変化の影響を強く受けた結果であろう。

平安時代の遺物は、土師器・須恵器・土製品・石製品・金属製品などがある。土師器は皿・坏・小甕・甕・壺・埴・鉢・大鉢・甑・ミニチュアなどがある。坏は、ロクロ成形・回転糸切りが主体で内面黒色処理を施すものは少ない。甕は輪積成形のものが主体でロクロ成形は比較的少なく、砂底が一定量存在する。また、農道8号から擦文土器を模倣した条痕が施文される土師器甕が出土している。壺には、外面上半ロクロ、下半ヘラケズリ、ヘラナデで、内面にミガキ・黒色処理を施すものがある。埴は輪積成形のもので、ロクロ成形はみられない。埴に類似した形状の大鉢は内面黒色処理が施され、ミニチュアには甕・壺・鉢などがある。須恵器には坏・甕・壺があるものの量的には少なく、五所川原産のものが卓越している。坏・甕・壺とも刻書がみられるが破片資料のためモチーフが不明なものが多く、壺底外面には菊花状調整を施すものがある。土製品は土鈴・土玉・土馬などがあるが、農道8号で出土した土器片錘や円盤状土製品は平安時代に使用された可能性がある。石器・石製品には砥石・玉など、鉄製品は鎌・刀子・鎌・鍬鋤先・紡錘車・筒状・錫杖状など、銅製品は紐部に特徴がある鈴がある。羽口や鍛造剥片も出土している。

遺跡全体からしてみれば、本発掘調査を行ったといえども、幅6mないしは幅8mのトレンチを14本設置し試掘・確認調査したのと同じ状況で、まだまだ多くの遺構が中平遺跡に眠っていることが明らかになったともいえる。この4年間の調査で縄文時代・平安時代の人々が残した生活の痕跡が多数みつき、縄文時代後期前葉の様相や、これまで漠然としていた9・10世紀の様相を考える上で、看過できない新たな知見を得ることができた。調査にご協力くださいました皆様に感謝いたします。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1996 『野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
 青森県教育委員会 2001 『長溜池遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第311集
 青森県教育委員会 2006 『野尻(3)遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第414集
 青森県教育委員会 2008 『上野遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第445集
 青森県教育委員会 2008 『寺屋敷平遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第450集
 青森県教育委員会 2009 『中平遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第474集
 青森県教育委員会 2010 『上野遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第486集
 青森県教育委員会 2010 『中平遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第490集
 五所川原市教育委員会 2003 『五所川原須恵器跡群』 五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
 奥野 充 2002 『白頭山－苦小牧(B-Tm)テフラの年大学的研究－正確な年代決定のために－』
 『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』13
 木村 高 2000 『津軽地方における平安時代の住居跡
 －付属する掘立柱建物と外周溝の機能について』『考古学ジャーナル』462
 工藤清泰 1996 『歴史時代 東北』『日本土器事典』
 児玉大成 2008 『角田文衛博士と葛西寛造氏が紹介した薄手式土器
 －タケハラコ遺跡出土の十腰内Ⅰ式土器を中心に－』『青森県考古学』16 青森県考古学会
 齋藤 淳 2008 『北奥出土の擦文土器について』『青森県考古学』第16号 青森県考古学会
 浪岡町 2000 『浪岡町誌』第1巻
 福澤仁之 他 1998 『年縞堆積物を用いた白頭山－苦小牧火山灰(B-Tm)の降灰年代の推定』『汽水域研究』5
 船木義勝 2011 『白頭山(長白山)10世紀噴火がもたらした「天慶出羽の乱」
 －火山噴火災害と兵乱から探る白頭山苦小牧火山灰降下の暦年代－』
 『みちのくの考古学－40周年記念論集』みちのく考古学研究会
 三浦圭介 1995 『古代』『新編 弘前市史』資料編1

写真図版

—平成21年度調査—



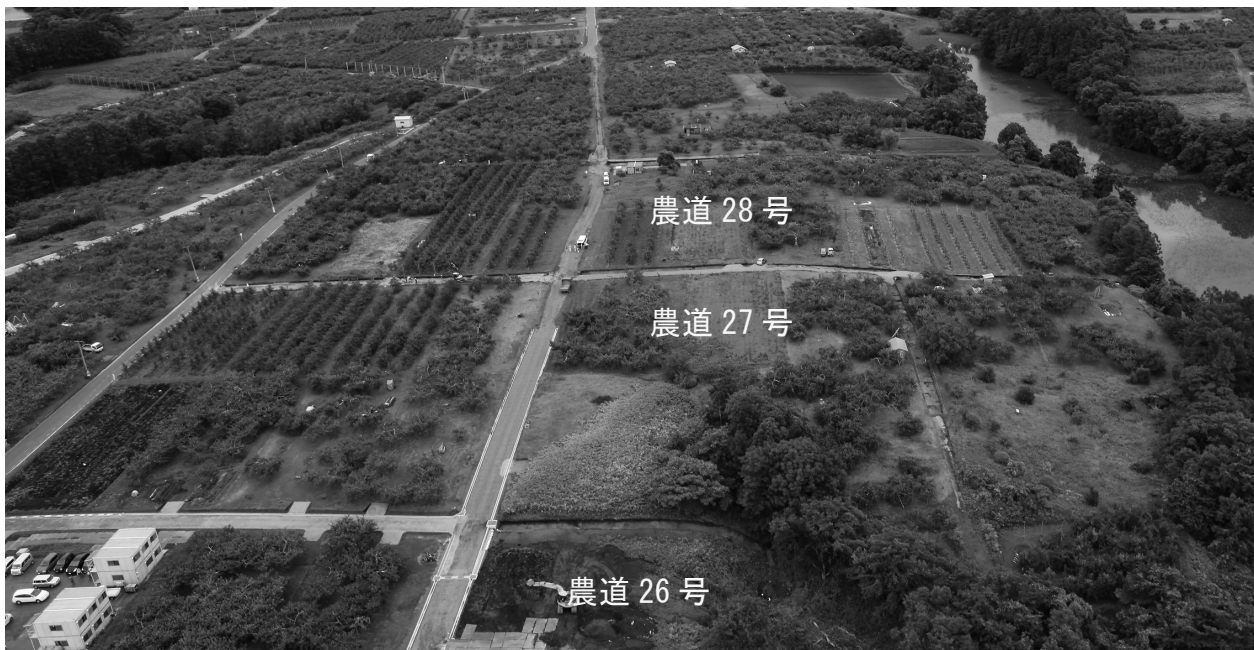


農道 2・26・27・28 号全景 E→



農道 2 号全景 NW→

写真2 平成21年度調査路線 (1)



農道 26・27・28 号全景 SW→



農道 26・27・28 号全景 SE→



基本層序C：農道 27 号 C-C' セクション SW→



基本層序D：農道 27 号 D-D' セクション N→

写真3 平成21年度調査路線（2）



農道2号調査区 N→

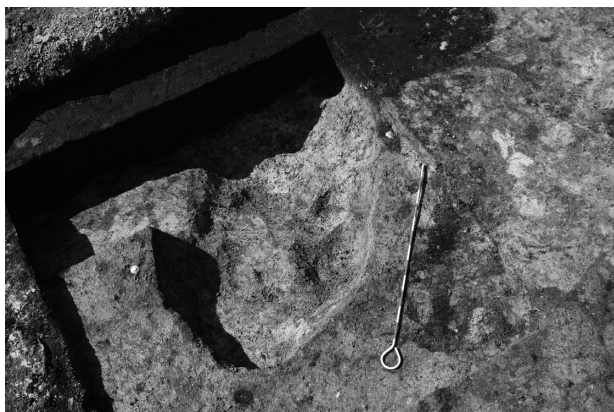


調査区(北東部) 完掘 N→



調査区(北西部) 完掘 SE→

写真4 農道2号(1)



SK08 完掘 S→



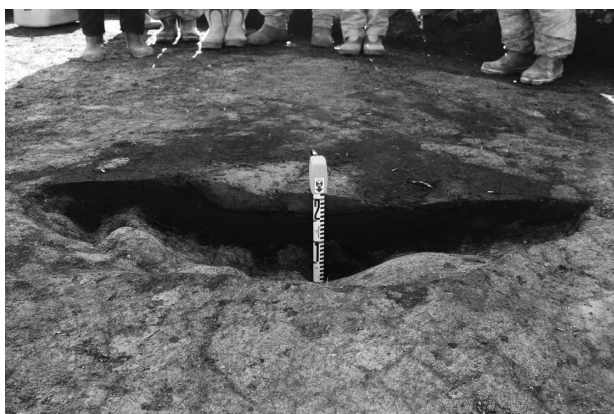
SK08 セクション SE→



SN01 検出状況 S→



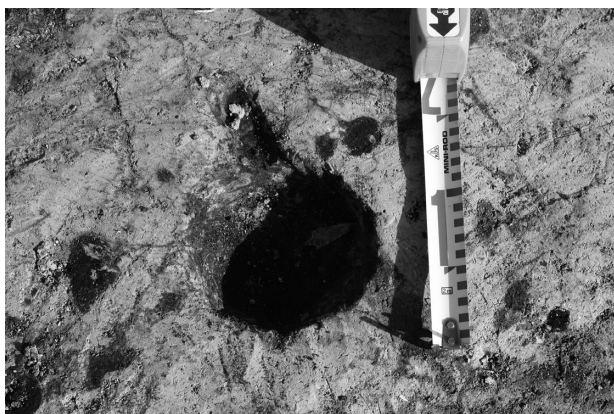
SN01 完掘 S→



SN01 セクション E→



調査区(北西部)完掘 S→



SP106 石鏃出土状況 N→

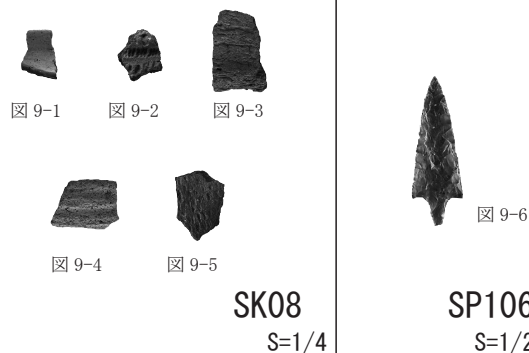


写真5 農道2号(2)



農道26号全景 S→



26- 1～9グリッド 完掘 SE→

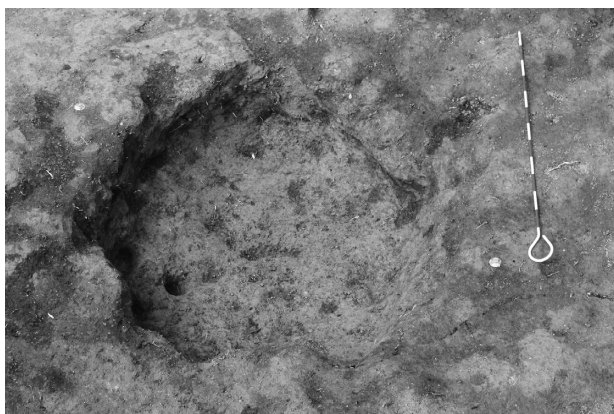


南半 完掘 NW→



26-10～17グリッド 完掘 SE→

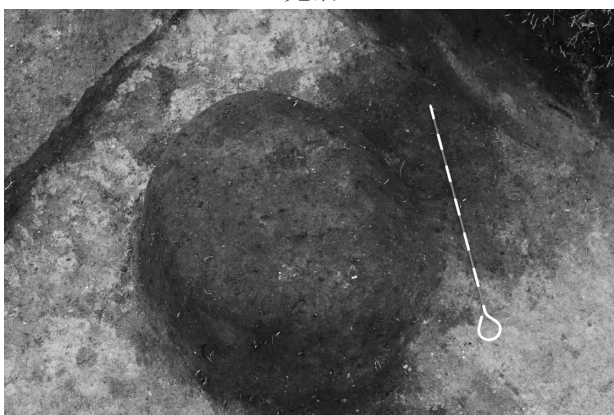
写真6 農道26号(1)



SK02 完掘 S→



SK02 セクション S→



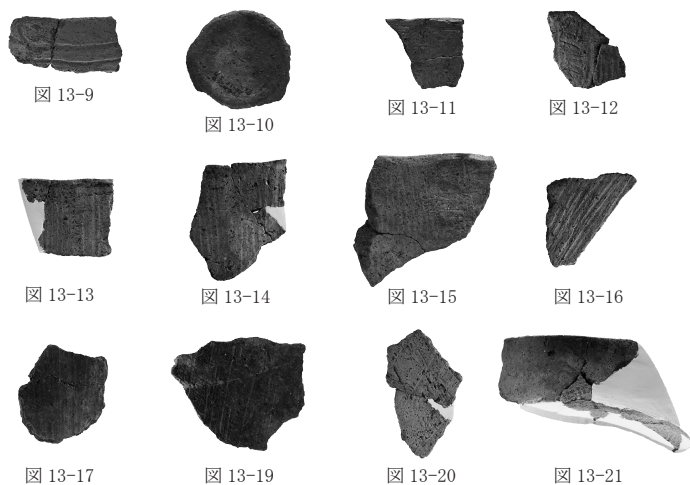
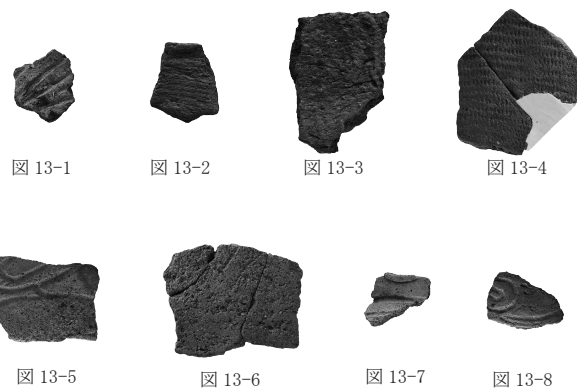
SN02 検出状況 S→



SN02 セクション W→



流末南端 完掘 S→



遺構外
S=1/4

写真7 農道26号(2)



農道 27 号遠景 SE→



農道 27 号南東半全景 SW→

写真8 農道27号 (1)



SI01 完掘 NW→



SI01 遺物出土状況 N→



SI01 セクション N→



SI01 カマド セクション NE→



SI01 カマド 完掘 NW→



SI01 カマド 遺物出土状況 NW→

写真9 農道27号 (2)



SI02 完掘 NW→



SI02 セクション E→



SI02 遺物出土状況 E→



SI02 遺物出土状況 NE→



SI02 カマド 完掘 NE→



SI02 カマド セクション NE→

写真10 農道27号 (3)



SI02 Pit1 完掘 N→



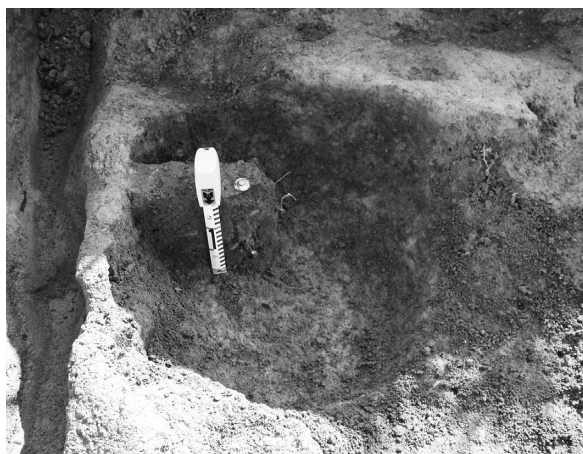
SI02 Pit1 セクション N→



SI02 Pit3 粘土出土状況 E→



SI02 Pit3 粘土半截状況 SW→



SI02 Pit2 完掘 NE→



SI02 調査風景 SE→

写真11 農道27号 (4)



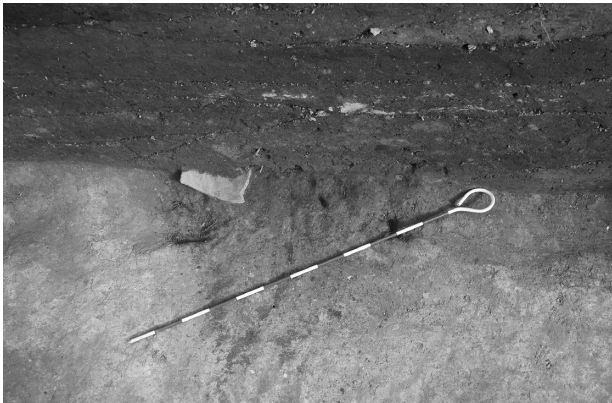
SI03 完掘 SW→



SI03 セクション W→



SI03・SD10 共通セクション S→



SI03 火床面検出状況 NW→



SI03 地床炉セクション W→



SI03 Pit1 完掘 SE→



SI03 Pit1 遺物出土状況 SE→

写真12 農道27号 (5)



SI04 完掘 SE→



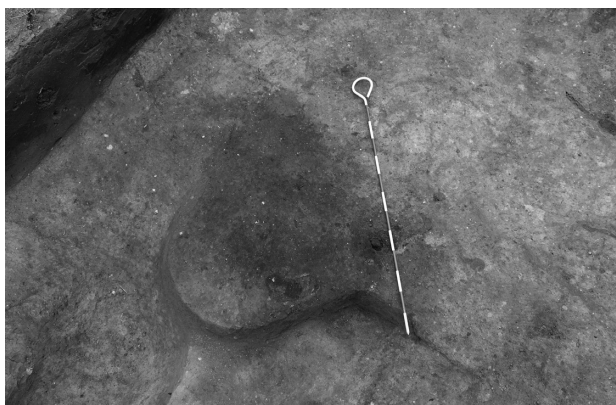
SI04 B-Tm 検出状況 SE→



SI04 セクション SE→



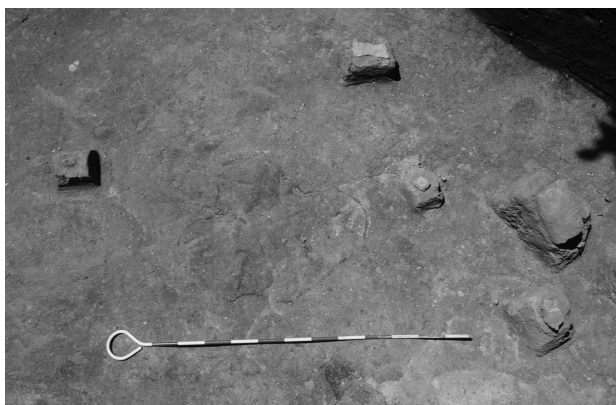
SI04 遺物出土状況 SE→



SI04 火床面検出状況 N→



SI04 火床面セクション E→



SI04 地床炉検出状況 E→



SI04 地床炉セクション S→

写真13 農道27号 (6)



SI05 完掘 SE→



SI05 検出状況 SE→



SI05 焼土・炭化材出土状況 SE→



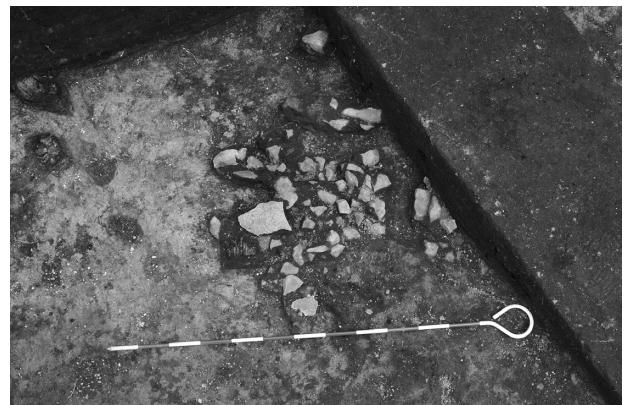
SI05 セクション SE→



SI05 焼土・炭化材出土状況 SW→



SI05 焼土・炭化材出土状況 SE→



SI05 破裂礫出土状況 W→

写真14 農道27号(7)

第1章 調査の概要
第2章 地形・基本層序
2号
平成26年度調査
27号
28号・1号
1号
平成25年度調査
29号
30号
第5章 理化学的分析
第6章 分析と考察
まとめ